

岡山県道徳教育郷土資料集
(中学校)
授業パッケージ

岡山県教育委員会

令和6年3月

まえがき

「特別の教科 道徳」では、一人一人の生徒が、答えが一つでない課題に道徳的に向き合う「考え、議論する道徳」へと質的に転換し、道徳教育の充実・強化を図ることが求められています。

県教育委員会では、平成七年度及び平成十二年度に郷土岡山について深く理解し、郷土を愛する心豊かな生徒を育成するため、道徳教育用郷土資料集を刊行いたしました。

このたび、この資料集をより一層活用していただくため、内容や構成について見直し、改訂版として「岡山県道徳教育郷土資料集（中学校）授業パッケージ」を作成いたしました。道徳教育の特性に鑑みれば、地域の特徴を生かせる地域教材は、生徒にとって特に身近なものに感じられ、教材に親しみながら、ねらいとする道徳的価値について考えを深めることができると考えております。

各学校においては、この授業パッケージの目的を十分に理解して大いに活用され、指導方法の一層の工夫改善を進め、道徳科の目標を実現されるよう期待します。

終わりに、本資料の作成に当たり御協力いただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和六年三月

岡山県教育庁義務教育課

授業パッケージの構成と利用の仕方

一 本書の構成について

1 本書は、第1部の「教材」と第2部の「指導案」で構成した。教材は前から、指導案は後ろから開いて利用できるようにした。

2 「教材」は、岡山県にゆかりのある先人の伝記や逸話などを取り上げている。

3 「指導案」には、教材を活用する際、参考となる本時案や板書例、他教科等との関連を掲載している。

二 本書の利用について

1 教材は、指導する時期や生徒の実態等を考慮して適宜工夫を加え、柔軟で多様な活用を図ることが大切である。

2 指導案は、例として示したものである。活用に当たっては、地域社会や生徒の実態等を十分考慮して、創意工夫していただきたい。

3 本書は、学校内で授業に使用する場合、複製して差し支えない。

4 本書の教材、指導案は、県教育庁義務教育課ホームページに掲載収録されているので、ダウンロードして活用することが可能である。

目次

はじめに

授業パッケージの構成と利用の仕方

第1部
(教材)
第2部
(指導案)

真の友とともに | 大原孫三郎 | 4 | 指1

土を味わう男 | 金重 陶陽 | 8 | 指5

岐路に立つ | 山室 軍平 | 12 | 指9

社会福祉の先覚者 | 留岡 幸助 | 16 | 指13

荒波を乗り越えて | 吉備 真備 | 20 | 指17

わが兵法のままに | 宮本 武蔵 | 24 | 指20

話せばわかる | 犬養 木堂 | 28 | 指23

作成委員

真の友とともに — 大原孫三郎 —

白壁の町、倉敷。文化都市としても名高いこの町の中心に大原美術館がある。

この美術館の設立者、大原孫三郎は、明治十三年（一八八〇年）、今の倉敷市に生まれた。

大原家は、当時、百町歩を超える土地を所有する地主であったが、この後、大きな紡績会社を経営するほどの財産家となった。

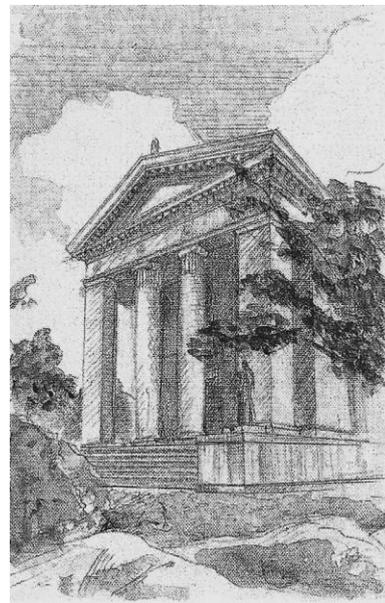
兄の病死でかけがえのない跡継ぎとなった孫三郎は、自由気ままで、わがままいっぱい育てられた。周囲からは「生意気なやつ」と言われ、少年時代の孫三郎は、心を許し合える友達がいなかった。

十六歳になった孫三郎は、父親の反対もあったが、家族の説得により上京を許され、東京専門学校（現在の早稲田大学）に入学した。「あの大原の息子」という特別な視線から逃れ、真の友人を求めて都会暮らしを始めたのだ。しかし、その新しい生活も一年とは続かなかつた。彼を利用しようとする悪友たちにそそのかされて、孫三郎の生活は乱れ、多額の借金をしてしまったのだ。

事情を知った父親の激しい怒りを受け、倉敷へ連れ戻された。夜汽車の中で、孫三郎は車窓を流れる暗闇をぼんやりと見つめていた。

（大変な過ちを犯してしまった。自分は、いったいこれからどうしたらいいんだ。）

明治三十二年（一八九九年）七月、失意の孫三郎に一大転機が訪れた。人に誘われて行った岡山孤児院の慈善音楽



百町歩：約一〇〇ヘクタール。

大原家：父親は倉敷紡績社長の大原孝四郎。大原家は、明治末期頃に約五〇〇ヘクタールを超える土地を所有する大地主。

孤児院：両親に死別するなどして、頼れる人がいなくなった子供を養育する施設。

会で、院長の石井十次に出会ったのだ。自分の全てをかけて孤児の救済と教育のために走り回る十次の姿に、孫三郎は身が震えるのを感じた。

(こんな人がいるのだ、こんな生き方があったのだ……)

そして、孫三郎と十次との交友が始まった。良い本を読むように、日記をつけるようにと十次は親身になって孫三郎に忠告した。孫三郎もまた、毎日が悪戦苦闘の孤児院経営について、十次の相談相手となった。孤児院の一室で深夜まで語り合いながら、孫三郎は自分という人間が変わっていくのを感じていた。

十次の強い影響を受け、人のために、社会のために、自分の生涯と財産とを捧げようと考えた孫三郎は、一時は千二百人もの子どもを抱えていた岡山孤児院への資金援助を手始めに、次々と社会事業を手がけていった。

同じころ、孫三郎は児島虎次郎という若い画家と出会った。虎次郎は孫三郎の一歳年下で、家業のかたわら絵の道を志し、単身東京で勉強を続ける苦学生だった。虎次郎は、画家として生きていく決意をとつとつと話し、そのひたむきな情熱と純粋な人柄は孫三郎の胸を打った。

(ここにも、すばらしい人がいた。虎次郎さんは誠実で、信頼できる人だ。この人と友達になりたい。そして、彼の才能を伸ばす手伝いがしたい。)

孫三郎は、虎次郎を物心両面にわたって援助し、虎次郎もまた孫三郎の期待にこたえようと創作に打ち込んだ。孫三郎の紹介で、十次と出会った虎次郎は、岡山孤児院に寄宿して、昼は子どもたちをモデルに筆をとり、夜は孫三郎や十次と共に語り明かすようになった。

明治四十年(一九〇七年)、孤児院での情景を描いた虎次郎の絵は、東京勸業博覧会美術展で一等賞を取った。自分のことのように喜んだ孫三郎は、さらに本場で学んでほしいと、彼をヨーロッパ留学に送り出した。

虎次郎との出会い：この年、東京美術学校に入学した虎次郎が応募した奨学生の面接が、二人の出会いだった。孫三郎は、郷土出身の有望な若者を援助しようとして「大原奨学会」を設立していた。

一等賞：この美術展で一等賞を取り、宮内省御買上となった「なさけの庭」は、虎次郎が岡山孤児院に住み込んで、その情景を描いたものである



虎次郎からの手紙を前に思案に暮れる孫三郎

虎次郎は、多くの画家との交流を通して多くのものを学び、創作活動に邁進した。ベルギーの美術学校を首席で卒業したのちに帰国した。しかし、虎次郎のような大器を日本の中に埋もれさせるのは惜しいと考えた孫三郎は、朝鮮・中国への旅行を、また二度目のヨーロッパ留学を勧めた。期待どおり、虎次郎は日本人として初めてサロン・ソシエテ・ナショナルの正会員になり、パリで最も認められた日本人になった。

そんなある日、孫三郎の元に、虎次郎から思いがけない手紙が届いた。「若い画家たちの勉強のために、日本の芸術界のために、西洋の近代名画を日本で見る機会を作りたい。そのために、本物の絵を少しでも多く日本に買って帰りたい。孫三郎さん、力を貸してほしい。」というものだった。

当時は、美術品のコレクションなど、金持ちの道楽と思われていた。その上、第一次大戦後の不景気で、孫三郎の事業の経営状態は大変厳しかった。そもそも、留学の目的は、虎次郎自身の絵の勉強のためであつたはずだ。

(虎次郎さん、洋画の収集はそんなにも意義あることなのか。)

何通にもおよぶ懇願の手紙を前に、孫三郎は悩んだ。

八か月後、迷った末に孫三郎は洋画購入を認める電報を打ち、その費用を送った。

(私には絵の価値は十分わからない。しかし虎次郎さんは、優れた洋画が必ずや日本美術教育のために、社会のために役立つものと信じている。そして彼は、私ならその考えを理解するはずだと確信している。私も、彼の信念と情熱を信じよう。)

昭和四年(一九二九年)、虎次郎はアトリエで倒れ、四十七歳の短い生涯

サロン・ソシエテ・ナショナル：一八六二年に創設されたフランスの美術団体。フランス美術の中核を支えていた。

を閉じた。

そして翌年、虎次郎の遺志を継いだ孫三郎の手によって、大原美術館は開館した。

「虎次郎さん、やっとできたよ、日本で最初の洋画の美術館が。私たちの願いが叶った美術館じゃ。そして、君が望んだように、この倉敷を、きつと文化の中心地にしてみせるよ。」

それから九十年、「友情」という固いきずなで結ばれた二人の生きざまを見つめてきた名画の数々は、今日も「世界のオオハラ」の壁を飾っている。

大原孫三郎略年譜

- 一八八〇 倉敷市に生まれる。
- 一八九七 東京専門学校（現早稲田大学）に入学する。
- 一八九九 石井十次と出会う。大原奨学会を設立する。
- 一九〇二 児島虎次郎と出会う。
- 一九〇六 倉敷紡績社長と倉敷銀行（現中国銀行）頭取に就任する。
- 一九一四 大原奨農会（現岡山大学内）を設立する。石井十次没する。
- 一九一七 石井記念愛染園（貧困者対象の夜学校・保育所）を設立する。
- 一九一九 大原社会問題研究所（現法政大学内）を設立する。
- 一九二一 倉敷労働科学研究所（現大原記念労働科学研究所）を設立する。
- 一九二三 倉紡中央病院（現倉敷中央病院）を開院する。
- 一九二六 倉敷絹織（現クラレ）を設立する。
- 一九三〇 大原美術館を開館する。
- 一九四三 孫三郎没する。

児島虎次郎略年譜

- 一八八一 高梁市成羽町に生まれる。
- 一九〇一 絵を学ぶために東京に出る。
- 一九〇二 東京美術学校（現東京芸術大学）に入学する。
- 一九〇四 東京美術学校を卒業する。
- 一九〇八 ヨーロッパに留学する。
- 一九一二 ベルギーのセント美術アカデミーを首席で卒業する。
- 一九一三 石井十次の長女友子と孫三郎の媒酌で結婚する。
- 一九二〇 サロン・ソシエテ・ナショナルの日本人初の正会員になる。
- 同年 モネの「睡蓮」の買い付けに成功する。
- 一九二二 エル・グレコの「受胎告知」の買い付けに成功する。
- 一九二九 虎次郎没する。

土を味わう男 — 金重陶陽 —

「良い土はおいしいものですね。」

男は土を手にとると、それを口に含み、かんで味を確かめた。

この男こそ、人間国宝にまでなった金重陶陽その人である。

陶陽は明治二十九年（一八九六）一月三日、備前の古い窯元の一つ金重家の長男として、岡山県和気郡伊部村（現在の備前市伊部）に生まれた。陶陽が生まれた明治時代は文明開化の時代で、西洋のものを取り入れるのに忙しくて、古くからある日本の文化が軽んじられた時代でもあった。もちろん、備前焼も見向きもされず、彼の家の生活も楽ではなかった。しかし、毎日の食べる米が満足にないときでさえ、幼い陶陽が父の仕事場の土をまたぎでもしようものなら、父にしっかり飛ばされた。



十四歳、高等小学校を卒業の年。家は依然として貧しかった。

（上級の学校へ進学したい。しかし、貧しい家はどうなるだろう。）

（自分はこの由緒ある金重家を継がなければならない。しかし、備前焼に未来があるのだろうか。）

心は揺れ動き、眠れない夜が続いた。

（よし、自分で備前焼の未来を切り開こう。自分が先祖の残してくれたものを受け継ぎ、いつまでも人々から愛さ

人間国宝：重要無形文化財保持者。演劇・音楽・工芸技術などで高度な技術を有する人が国が認定している。

文明開化：明治時代になつてヨーロッパやアメリカの近代的な文化を取り入れて、世の中の様子が変わったこと。

高等小学校：尋常小学校の後、学ぶ学校のこと。

れる作品を作ろう。)

陶陽は進学をあきらめた。十六歳のときから、一人で窯をたき、一人で焼き物を売って歩いた。ほとんど金にはならなかったが、一生懸命だった。

「金にもならないものをよくそんなに熱心にやるものだ。」

近所の人はあきれて見ていた。

「良いものはそうたやすくできるものではない。悪いものが売れるのが不思議だ。」

陶陽は言い返した。そして、焼き物や古美術品の展示会を欠かさず見て回った。

ある日、陶陽は京都の財産家を訪れた。そこで古備前を見た。

「これだ。」

人が使いやすいようにする工夫から生まれた無駄のない形の美しさと力強さがあった。その日から、茶器作りを始めた。だが、すぐに大きな壁に突き当たってしまった。

陶陽は、作った茶器を茶道の先生のところを持って行った。

「これは使い物になりませんね。表面がざらざらして茶巾が引っ掛かってしまうでしょう。」

先生は、茶器をじつとながめたりなでたりした後、そう言った。

「備前焼では良い茶器は作れない。茶道を何も知らない田舎人が茶器など作れるものか。」

人々が笑っている声が耳に入ってくる。物事の厳しさを思い知らされた。

(多くの人々に本当に愛されるものを作りたい。そして、桃山時代の古備前に追いつきたい。)

古備前：江戸時代前期
までに制作された備前
焼。

茶巾：お茶をたてる時、
茶碗をぬぐうのに用い
る麻布。

陶陽は、それから表千家の茶を習い、大阪や京都まで古備前を見に出かけた。そして、茶器を作っては考え、考えては作った。友人から、いかげんにやめるよう忠告されたが、どうしても後には引けなかった。

(何かが違う、何かが……。)

陶陽は行き詰まった。

(そうだ。土だ。土は備前焼の生命なのだ。)

それからというものの、毎日毎日、手にマメをつくりながら伊部付近の田んぼを掘りあさって土を調べた。ふと、土にも味があるのではないかと思ひ、口に含んでみた。すると場所によって土の味が違っていた。土をなめるので口の周りに泥をつけて歩いていて、おかしくなつたと思われたこともあった。また、田んぼに穴を開けたら、水が漏って困るとしかられたこともあった。まっ白に雪でおおわれた日には、スコップを握る指は凍りそう、白い息を吹きかけながら掘った。

やがて来た春、桜の満開の下でも掘り続けた。土を探し求めて、何度桜の花を見たことだろうか。しかし、なかなか思うような土は見つからなかった。疲れはてて腰をおろし、一人ため息をついた。それからどれくらいの間がたったことだろう。

(よし、もう一度四、五寸のところを掘ってみよう。)



表千家：茶道の流派のひとつ。

伊部の田んぼ：現在伊部の田んぼの下層部の干寄と呼ばれる粘土が備前焼の最高の粘土とされている。

四、五寸：一寸は約三センチメートル。四、五寸は約十二〜十五センチメートル。

気を取り直して掘り起こし、いつものようにその土を口に含んだ。みるみるうちに陶陽の目から涙があふれだした。

(おいしい。これだ。これが探し求めていた土だ。)

汗と涙と土とでぐしゃぐしゃの顔のまま、田んぼの持ち主のところに駆け込んだ。

「あの土なんです。」

ぶしつけに切り出した。

「陶陽さんかね。まあ、そこで顔を洗いなさい。」

手ぬぐいを差し出されてやっと我に返った。その土を足で踏んで、練っては小さな石粒を取り除き、練り直してはまた小さな石粒を取り除いて、一年寝かせた。やっと土の作り方を発見し、桃山時代のような土味を出すことができたときには、陶陽は三十四歳になっていた。そして、土の完成は、同時に陶陽の焼成の工夫、すなわち火への挑戦への始まりでもあった。

金重陶陽略年譜

- | | | | |
|------|-------------------------------------|------|--------------------------------------|
| 一八九六 | 備前市伊部に生まれる。本名は金重勇。 | 一九五六 | 重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される。 |
| 一九一〇 | 父椋陽について作陶を始める。 | 一九六〇 | 岡山県文化賞を受賞する。 |
| 一九三〇 | 古備前の美を求めて土を探し、研究して桃山調の土味を出すことに成功する。 | 一九六六 | 紫綬褒章を受賞する。 |
| 一九五二 | 北大路魯山人、イサム・ノグチらが備前を訪れ、交友を深める。 | 一九六七 | 昭和天皇・皇后両陛下の伊部行幸啓の際、ろくろで大鉢を作つてご覧に入れる。 |
| | これにより備前焼が全国的な視野で評価されるようになる。 | 同年 | 没する。（七十二歳）勲四等旭日小綬賞受賞を受賞する。 |

焼成：火の温度の上げ下げをすることにより、作品の肌に変化をつけること。陶陽は火の性格をよく知っており、「窯焚きの名人」と呼ばれた。

岐路に立つ — 山室軍平 —

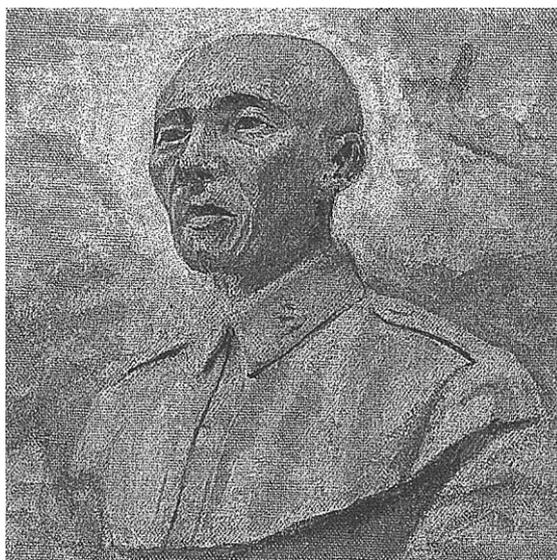
新見市（旧哲多町）の本郷小学校の校庭の片隅に、「山室軍平」の像が立っている。

軍平は、明治五年にこの地の貧しい農家の八番目の子どもとして生まれた。軍平が生まれた当時の日本は、公共の福祉対策が十分でなく、食べるものさえ満足に得られず、貧しい生活のまま死んでいく人も珍しくなかった。

軍平はそんな社会的に弱い立場の人々を救うために、お金や食べ物を提供したり、結核療養所や貧しい人のための病院を開設したり、不況対策として労働者紹介所を開設したりするなど、数々の社会福祉事業に取り組んだ。

そんな彼の生き方に大きな影響を与えたのは、母、ともの存在だった。ともはとても優しい人で、貧しい人が訪ねてくると、自分の食べ物が無くなっても、食べ物を与えることがしばしばあった。ともその後ろ姿を見て育った軍平は、人を思いやる優しさを自然に身に付けていった。

また、軍平は幼いころから多くの書物を読んで育った。向学心が強く、いつかは学問で身を立てたいと考えていた。その思いが募って、十四歳の時に上京。活版所の職工として働きながら、英語や政治・経済などを独学で学んだ。勉学に励む中で自分の将来を考えたとき、ともの影響もあつてか、世の中の弱い立場の人を救いたいという気持ちが強くなっていった。



岐路：わかれ道。

活版所：活字を組んで、印刷するところ。

そんなとき、ある人から「単に知識を得ることに重きを置かず、人徳を磨き、知識や人徳をもって人のために尽くせる人物を作りたい」と考えた新島襄にいしまじょうの教えや人格のすばらしさなどのうわさを聞き、ぜひ教えを請こいたいと考えるようになった。そして、学資のめどもたたないままに、新島襄の大学へ進学を決意した。

大学に入学してからは、学問のおもしろさや深さにひかれ、尊敬する先生や先輩たちにも恵まれ、心豊かな日々を送っていた。だから、経済的な困難も乗り越えることができた。しかし、尊敬する新島先生が亡くなって、大学では、「神・宇宙・人生・永遠」など、抽象的なことばかりが論じられるようになっていった。軍平もたくさんの本を読み、数多くの講演を聞いて勉強はげに励んだ。しかし、学べば学ぶほど、抽象的なことばかり論じて、それを現実の生活の中で生かそうとしない学問のあり方に疑問を感じ、学問に対する興味もだんだん薄うすれていくのだった。

軍平は迷っていた。そして、心身ともに疲れ果てていた。

（大学をやめるべきか。それともこのまま卒業まで続けるべきか。）

学資はもとより、その日の食事代もなかった。十日間以上の断食は、身体にはかなりこたえたが、何度も同じような苦難を乗り越えてきた。それ以上に軍平を苦しめているものがあつた。それは、学問に対する迷いであり、自分の生活に目的を見いだせなくなった不安だった。

その時、脳裏によき理解者であり、経済的な援助をしてくれた吉田の優しい顔が浮うかんできた。

（今大学をやめたら、自分の食費を切り詰つめて、わたしの学資に充あててくださり、励ましの言葉を幾度いくどとなくかけてくださった吉田さんに何と言えはいいのだろう。）

また、「岡山孤児院のために力を貸してほしい。」と言った石井十次じゅうじの言葉が思い出された。いずれは社会的・経

人徳：他人の苦しみやつらさをのぞき、喜びや楽しみを与えようとする徳。

新島襄

（一八四三〜九〇）

アマースト大学を卒業。岩倉使節団に随ま行し欧米の教育施設を視察。帰国後、京都に同志社英学校（後の同志社大学）を創立。キリスト教精神に基づく教育に専念した。

学資：学問を修めるのに必要な費用。学費。

脳裏：頭の中。心の中。

吉田：吉田清太郎。軍平の恩人の一人。同志社大学の先輩。

済的に恵まれない人のために働きたいと考えていた軍平にとって、一つの模範であり、大きな刺激になっていたのが十次であり、十次の開いた岡山孤児院だった。十次は自らの私財をすべてつぎ込み、孤児を救うための施設を建てたのだった。彼の孤児に対する深い愛情は、彼の生活のすべてに表れていた。軍平は以前から、大学で寄付を集め、石井のもとに送っていた。

ある時、岐阜や愛知を中心に大地震が起こり、七千名以上の人々の命が奪われ、十四万戸以上の家屋が失われた。学生だった軍平は、いても立ってもいられなくなった。そして、自らの考えで、孤児の救済のために、被災地のほとんどの役場に行つて、岡山孤児院で孤児をお世話できることを知らせて歩いた。被災地の子どもたちの泣き叫ぶ声や哀れにやせ細った姿が、軍平の行動力を一層高めた。十次は軍平の行動に感謝し、その行動力に影響を受け、自ら被災地に出向き、孤児救済に取りかかった。軍平は、十次と知り合い、活動に協力できたことにより、十次の生き方に深い共感を覚えたのだった。軍平の心の中は、すぐにでも貧しい人や恵まれない人のために働きたいという気持ちでいっぱいになっていた。

軍平は、迷った末に、五年間学び、卒業を目の前にした大学を去った。

それから数年後の十二月、雪がちらつく東京の街頭で、道行く人々に何度も何度もこう呼びかけている軍平の姿があった。

「もうすぐお正月がきます。しかし今、食べる物はもちろん着る物も、そして、住むところにも困っている人々がたくさんいます。皆さんのご厚意で、そのような人々を救っていただきたいのです。お金でも食べ物でもなんでもけっこうです。どうか皆さん、ご協力ください。」

孤児院：両親に死別するなどして、頼れる人がいなくなった子供を養育する施設。

大地震：濃尾地震のこと。

一八九一年十月二十八日濃尾平野に発生した激震。

なかなか善意の品物は集まらなかったが、軍平は一向にくじける様子もなく、さらに大きな声で呼びかけ続けるのだった。その顔は、明るく力強く自信に満ちていて、迷いはなかった。

そのうち、ある老婦人が餅をかごに入れてくれてから、一人また一人と、お金やパン・果物・おかしなどをかごに入れてくれた。

「ありがとうございます。ありがとうございます。これで、温かい気持ちでお正月を迎えられる人が増えます。ご厚意に感謝します。」

軍平は、かごに集まった物を一つ一つ配るときのことを思うと、うれしくてたまらなかった。雪の舞い落ちる空に、貧しい人々の笑顔が次々と浮かんでくるのだった。

山室軍平略年譜

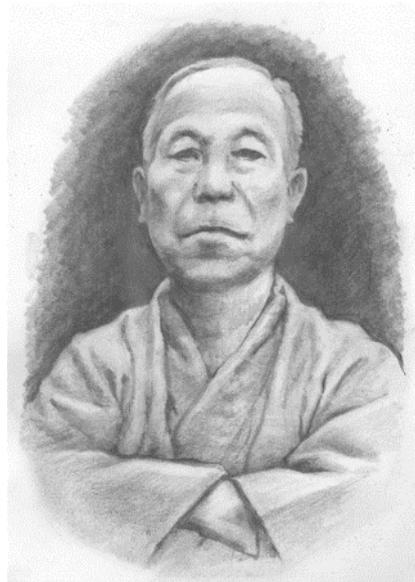
- | | | | |
|------|--------------------------|------|---------------------|
| 一八七二 | 阿哲郡本郷村に生まれる。 | 一八九九 | 佐藤機恵子と結婚する。 |
| 一八八〇 | 養子となる。(足守の杉本弥太郎宅・軍平の母の弟) | | 妻とともに「平民の福音」を執筆する。 |
| 一八八六 | 築地活版製造所の職工となる。 | 一九〇四 | 第三回救世軍大会へ出席のため渡欧する。 |
| 一八八九 | 同志社大学に入学する。 | 一九〇九 | 慈善鍋の運動を始める。 |
| 一八九二 | 救世軍に入隊する。 | 一九二六 | 児童虐待防止運動を始める。 |
| 一八九四 | 高梁の教会で伝道師として働く。 | 一九四〇 | 三月一三日 没する。 |
| 一八九六 | 日本初の救世士官となる。 | | |

社会福祉の先覚者 —— 留岡幸助 ——

北海道紋別郡遠軽町留岡、ここに北海道家庭学校（以下「家庭学校」

という。）がある。この家庭学校は、現在民間の施設としては全国でただ一つの男子の児童自立支援施設である。礼拝堂や宿舎、畜舎など三十二棟にのぼる施設をはじめ、農場や山林を含む四百三十九ヘクタールのこの教育農場は、大正三年（一九一四）の開設以来、二千五百名以上の少年たちの社会復帰を助けてきた。

この家庭学校の創始者が、留岡幸助である。



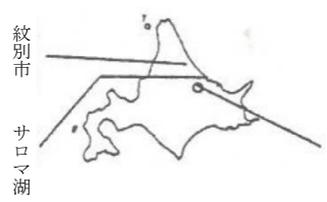
元治元年（一八六四）、幸助は、備中松山（現在の高梁市）で町人の子に生まれ、すぐに米屋を営む留岡家の養子となった。

少年時代のある日、幸助は士族の子とけんかをした。相手が木刀で打ってきたのに対し、自分は相手の腕にかみついて抵抗したのである。相手の士族の家は怒り、幸助の義父に取り引きの中止を伝えてきた。その結果、幸助は義父に殴り倒されるという罰を受けたのである。

（もともとは相手の暴力が原因なのに、なぜ自分だけが罰を受けるのか。相手の暴力は棚上げにして、自分だけ罪人扱いされたのではあまりにも不公平だ。）

こうした出来事を通して、身分差別は不合理だと感じていた幸助は、その後、神の前では士族も町人も同じ価値をも

北海道紋別郡遠軽町留岡



紋別市 サロマ湖

先覚者：人々より先に物事の道理や時代の流れの変化を見抜き、事を行った人。

児童自立支援施設：児童福祉法に基づく児童施設の一つで、不良行為をするおそれのある児童や家庭環境等から生活指導を要する児童を入所させ、必要な指導を行って自立を支援することを目的とする。

士族：明治維新の際、旧武士階級に与えられた身分。法律上の特権はない。

棚上げ：問題を一時的に未処理・未解決のままにしておくこと。

っているというキリスト教の教えに触れ、高梁教会で洗礼を受けた。そして、明治十八年（一八八五）、京都の同志社英学校に進学した。当時同志社英学校では、世の中への奉仕を自分の使命として、社会的に弱い立場の人々に尽くすことを教えとしていた。

「留岡君、君はこの先どうしたいんだい。」

同志社英学校で友人となった岡本に尋ねられた幸助は、手に持っていた本の表紙を見せた。

「実は、この『監獄改良家としてのジョン・ハワード』という伝記を読んで、僕は身震いがしてね。それで僕は、監獄改良に取り組もうかと考えているんだよ。」

「なぜ監獄なんだい。世間では、罪人はどんな愛をもってしても改善できないとして、冷たく見捨てていることなのに。」

岡本は尋ねた。

幸助の脳裏には、少年の日に感じたあの苦い思い出が浮かんでいた。

「僕はそうは思わないんだ。」と言ってから、幸助は話を続けた。

「政府は、罪人を北海道に送りこみ、まるで牛馬のように扱って過酷な環境で働かせるそうさ。いくらなんでもひどすぎるよ。人間は、きっかけさえあれば、自分の間違いに気付き改心することだってできると思うよ。だから僕は、罪人の心の支えになりたいんだ。ハワードのように、一本の蠟燭ろうそくになって社会の暗黒を照らしたい。」

幸助の決意は固かった。

幸助は同志社英学校を卒業後、教会での伝道生活を経て、アメリカに渡り、監獄事業について学んだ。そして、帰国後は非行少年たちの自立を支える「家庭学校」を設立しようと考えた。罪人の多くが不遇ふぐうな少年時代を送り罪を犯し

洗礼：キリスト教徒になるための儀式。

同志社英学校：のちの同志社大学になる。

監獄：受刑者・刑事被告人・被疑者を監視する施設。

伝道：その宗教の教えを伝え広めて、信仰をうながすこと。

監獄事業：それまで監獄は罰を与える施設と考えられていたが、十九世紀末、監獄では受刑者は過去について罰せられ、将来に備えて訓練されるべきという考えによって、監獄を改良する動きが起こった。

たことから、罪を犯す前の少年期から支援することが重要と考えたからだ。彼はまず、東京の巣鴨すがもに家庭学校を設立した。しかし、厳しい大自然こそが人間を育ててくれると信じ、北海道の社名淵しゃなふちに北海道家庭学校を設立したいと考えるようになった。ところが、理想に燃える幸助に思わぬ壁が立ちはだかった。

家庭学校の設立に向けて、地域から反対の声が上がったのだ。住民たちは、非行少年が集められる家庭学校が地域に悪い影響を及ぼすのではないかと心配していたのだ。

「少年たちは確かに過あやまちを犯したけれど、それは、親と離ればなれになり生きていく上で仕方なく過ちを犯してしまった者が多いのです。自分で生きていく力を身に付ければ、この先再び過ちを犯すことはないと思います。家庭学校は、少年たちが自ら過ちを反省し、これから生きていく力を身に付けていくための施設です。私は、彼らの過去にとらわれず、未来に希望をもたせてやりたいと思います。どうか彼らにやり直す機会をもたせてやってください。」

幸助は、家庭学校設立への理解を求めていったのである。

こうした努力の末、ようやく設立した家庭学校で、幸助は少年たちの立ち直りに向けて、試行錯誤しこうさくごの日々を重ねた。当時、少年たちを収容する施設の多くは、高い塀へいや見張り台があり、逃げられないようにしっかりと監視することが当たり前だった。しかし、幸助はそれでは、少年たちは立ち直れないと考えていた。幸助は、家庭的な雰囲気の中で少年たち一人一人と向き合い、彼らが家族として大切にされること、自然の中で一生懸命働くことで自分が役に立っているという実感をもたせることが大切だと考えていた。彼らの一面だけを見て判断するのではなく、彼らを信じ彼らのよさや可能性を引き出し伸ばすことで、彼らに社会の中で生きていく力を身に付けさせようとした。そのため家庭学校では、鍵かぎのない部屋で少年たちと職員が共に生活するようにした。また、学校での勉強だけでなく荒れた土地

を開墾し、野菜を育てたり牛馬の世話をしたりするなど共に汗を流して働く中で、彼らの可能性を引き出していった。世間では陰口をたたかれ、見向きもされなかったのに、ここでは一人の人間として大切にされ、一生懸命働けばそれが周りから認められ、大自然もそれに応えてくれる、このことが、少年たちのすさんだ心を次第に回復させていった。そして、一生懸命働く少年たちの姿は、家庭学校の設立に否定的だった人々の心を動かし、家庭学校は地域に受け入れられていったのである。

北海道家庭学校がある地には「留岡」という名がついている。それは、自分の生きる価値、生きる目的を見いだしてほしいという思いで少年たちに寄り添い、可能性を信じて自立を支え続けてきた幸助の長年の功績をたたえたものである。児童福祉法の改正により罪を犯した児童を受け入れる施設から社会的に養護が必要な児童を受け入れる施設へと変わってきているが、現在も豊かな自然の中で、幸助の思いは受け継がれ、少年たちの大切な居場所となっている。



留岡幸助の略年譜

- 一八六四 備中松山城下（現在の高梁市）で町人の子として生まれる。
- 一八八五 同志社英学校別科神学科に進む。
- 大学卒業後 丹波第一教会で伝道生活に入る。
- 一八九一 北海道空知集治監監教諭となる。
- 一八九四 渡米遊学（三十歳）。（一八九六）
- その後、霊南坂教会牧師、巢鴨監獄監教諭となる。
- 一八九九 巢鴨家庭学校創設。以後、校長を務める。
- 警察監獄学校教授となる。
- 一九〇〇 内務省嘱託となる。（一九一四）
- 一九一四 北海道に渡り、北海道家庭学校（家庭学校北海道農場・社名淵分校）を開校。（五十歳）
- 一九三三 勇退し、名誉校長となる。翌年、没する。

※¹ 教諭師：刑務所・少年院などで、收容者に対して徳性の育成を目的として教育する人。

※² 嘱託：通常の社員・職員とは異なり、その能力などを生かして特定の仕事を依頼された人。

荒波を乗り越えて — 吉備真備 —

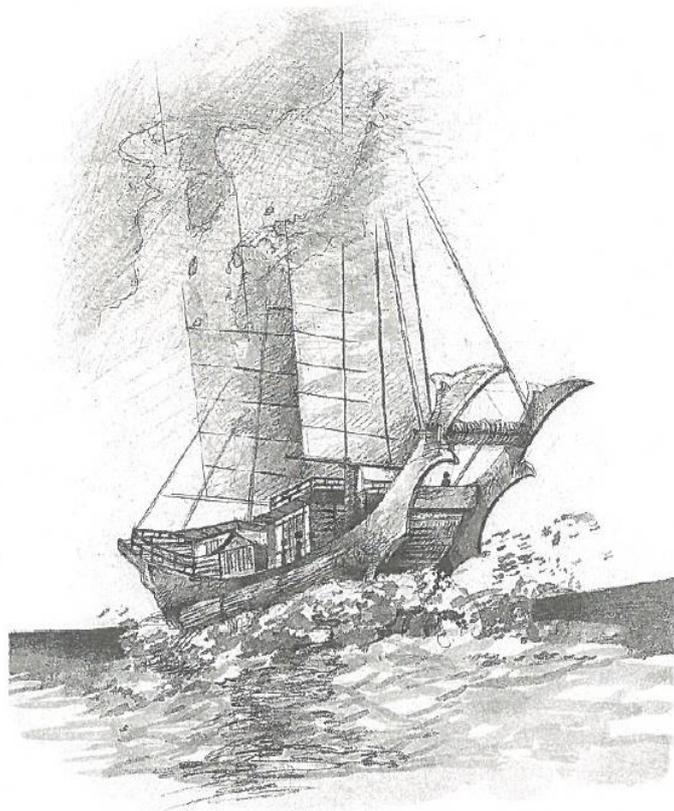
きびのまきび

飛鳥時代の終わり、六九五年の春、下道郡八田郷（現在の倉敷市真備町箭田）に大きな産声が響いた。罔松（のちの真備）の誕生である。すくすくと育った罔松は、父が奈良の都で宮廷の警備をする仕事をしていたため、両親ともに都で生活するようになった。

罔松はよく勉学に励み、国に仕える役人を養成する「大学寮」に入学した。この大学寮は、全国に一つしかなく、位の高い役人の子どもだけが入ることができた。父の位が低かった罔松は、特別に試験を受けて合格した。罔松は、誰よりも一生懸命学問に励んだ。そして首席で卒業し、名前を真備と改めることを許された。

七十七年、真備は、第八次遣唐船留学生に選ばれ、僧の玄昉や貴族の阿倍仲麻呂らと共に、四隻の船に乗り、唐に向けて出発した。真備は、まだ二十三歳の若者だった。

遣唐船の旅は、大変危険なものであった。当時は、季節風の知識に乏しく、遣唐船はよく難破した。そこで遣唐大使と副使は必ず別々の船に乗り、無事に着いた方が国の代表を務めた。また無事に着いても、次の遣唐船の迎えは



罔松：荒木栄悦著「吉備真備物語」の中で使用された架空の幼名。

首席：一番いい成績。

いつ来るかわからず、三十年後に戻った例もあった。

家族の心配も相当なものだった。もちろん、旅に対する自分自身の不安も大きかった。しかし、真備は大学寮の講義だけでは物足りなさを感じており、唐で本物の学問を学びたいという気持ちが増しに強くなって、留学生になることを決意した。

唐の都、長安は世界で最先端さいせんたんの政治制度や文化があり、遣唐使は、その進んだ仕組みを日本に取り入れ、国家の確立をめざすために派遣はけんされたものであった。真備たちは新しい学問や政治制度など多くのことを日本に持ち帰ろうと必死で学んだ。

十七年の歳月が流れ、待ちに待った遣唐船が日本から着いたという知らせが届いた。真備たちは長安を出発し、陸路を経て、船に乗り込みついに種子島たねがしまに流れ着いた。そして島伝いに北上し、半年以上かけて、七三五年の春、ようやく奈良の都に帰り着くことができた。

真備は、唐から持って帰ってきた知識や経験を活かし、新しい国を作ろうと動き始めた。病気で困っている民衆のために医療いぼくを施して薬を与え、米のとれない民衆のために、新しい作物の作り方を教えた。さらに儒教や仏教を盛んにして、唐のような国を作ろうと天皇に提案した。こうして国のために尽力した真備は天皇の信頼を得て、姓を与えられ、「吉備朝臣真備」と名乗ることを許された。

しかし、当時政権を握っていた藤原仲麻呂にうとまれ、真備は筑前守ちくぜんのかみ、続いて肥前守ひぜんのかみとして都から遠く離れた九州へと追いやられてしまった。真備は、九州で生活するようになって、常に都の様子や国づくりのことが気にかかっていた。

長安：唐の中心的な都市で、人口一〇〇万人を超え、文化の中心として栄えていた。

種子島：鹿児島県の南方にある島。

筑前：現在の福岡県北西部。
肥前：現在の佐賀県あたり。

そんな折に、都から一通の手紙が届いた。今度は遣唐副使として再び唐へ向かうようにという内容であった。

真備にとっては、嬉しい知らせだった。今の日本は国の政治が乱れ、豪族たちによる激しい権力争いが起こっている。貧しい生活をしている人々も、その争いに巻き込まれて命を失っているのだ。さらには日照りや干ばつが続いて飢饉ききんが起り、人々は税が払えず苦しんでいる。国の政治の仕組みを整えて、人々が安心して暮らせる国にしていくためには、もう一度唐に行つて多くのことを学ばなければならない。

そう考えた真備ではあったが、同時に不安も重くのしかかってきた。唐までの航海は決して安全ではない。前回はたまたま無事に戻つてこられたが、命を落とした仲間たちも大勢いる。再度日本に戻つてこられるという保証はない。年齢も五十五歳を過ぎている。いくら多くのことを学んでも、それを持ち帰ることができなければ、新しい国づくりを進めることはできないのだ。

どうすべきか考え抜いた末、それでも再び唐に行くことを決意した真備は、七五一年、第十次遣唐副使として遣唐船に乗り日本を出発した。

真備は、遣唐副使としての任務を果たすとともに、以前共に唐に渡つた阿倍仲麻呂と再会し、政治や仏教、文化などについて、さらに深く学んだ。その後、一緒に帰ることとなった仲麻呂らの乗つた船は嵐で遭難そうなんし、日本に戻ることはできなかったが、真備の船はまず沖繩に着き、さらに紀伊半島に流れ着いた後、無事都に帰ることができた。

このとき真備は唐の高僧であつた鑑真かんじんを日本に招き、日本の仏教界の立て直しに努めた。また、造東大寺長官ぞうとうだいじちようかんに就任し、奈良の都に東大寺を建立する責任者としての役目を果たした。また、藤原仲麻呂の反乱をいち早く鎮圧ちんあつするなど治安の乱れも治めた。それらの功績から真備は、中納言ちゆうなごん、大納言だいなごんとなり七十二歳のとき、右大臣うだいじん（天皇、法王、左

造東大寺長官：東大寺

鎮圧：反乱を武力によつてしずめること。

大臣に次ぐ地位)にまで昇進した。

真備は、地方の位の低い役人の子どもに生まれたが、よく学び、政治上の重要人物として活躍した。奈良時代の儀式の様式を確立し、国を治める律令制度の仕組みを改革したといわれている。その後も真備は自分の一族を重用することもなく、自分の使命を全うすることに全力を注ぐ清潔な学者であった。

右大臣を辞めた真備は、故郷に帰って余生を過ごし、七七年に八十一歳で没している。

吉備真備略年譜

- 七一七 第八次遣唐留学生として入唐。
- 七三五 帰国。その後、大学助となり、知識人として活躍。
- 七四六 姓を与えられ、「吉備朝臣真備」と名乗る。
- 七五〇 筑前守、次いで肥前守として左遷される。
- 七五一 第十次遣唐副使として、二度目の入唐。



- 七五三 帰国。その後、太宰大式として、九州に左遷される。
- 七六四 中央に帰る。造東大寺長官となる。その後、中納言、大納言、右大臣となる。
- 七七一 右大臣を辞める。
- 七七五 八一歳で没する。

重用…その人を重んじて重要な役に就かせること。

わが兵法のままに — 宮本武蔵 —

関ヶ原の合戦（一六〇〇年）から四年後、武蔵は京にいた。一番強い兵法者を打ち破り、名を上げるためである。

武蔵が倒そうとした吉岡家は、京に「室町兵法所」を構えていた。代々、足利將軍家の剣法師範役を務めてきた名門である。武蔵は、吉岡家の当主清十郎に果たし状を突きつけた。

「こやつたくらの企みは見え透いておる。吉岡に挑んで名を上げたいという、ただそれだけのことだ。」

清十郎は放っておきたかったが、挑戦に応じなければそれを都中に知らせると、果たし状には書いてあった。清十郎が受けて立たざるを得ないよう、武蔵は仕掛けていたのである。

数人の門弟もんていを従えて、清十郎は夜明け前に京の北の外れ、蓮台寺野れんたいじのにやってきた。

「武蔵は、まだ現れぬか。」清十郎はいらだっていた。

「臆病風に吹かれたのかも知れません。」

門弟が気休めを言ったとき、草むらからいきなり、武蔵が現れた。不意を突いた武蔵の出現に、清十郎は心を乱され、表情にもそれが表れた。木刀を構えた清十郎に対し、武蔵は、長めの木刀を提げたまま、清十郎との距離を一気に詰めた。清十郎の技も性格も事前に調べていた武蔵は、落ち着き、大胆に攻め、勝つために万全を期した。そしてもうひとつ、なんとしても一番強い兵法者を倒すのだという武蔵の気迫が、勝負を決めた。

武蔵は清十郎の申し分のない突きをかわし、飛び上がりざまに木刀を振り下ろした。その一撃で、清十郎は倒れた。

慌てふためく門弟たちを尻目に、武蔵は素早く立ち去った。大胆にして細心、武蔵の完勝である。武蔵は兵法の天才であつた。

兵法：古代中国で発達した戦闘に関する学問で、『孫子』『呉子』『司馬法』などの書がその代表。

師範役：武道・芸道・学問の指導者。

門弟：弟子。

蓮台寺野：京都府京都市北区紫野十二坊町辺り

武蔵は、十三歳で新当流の兵法者・有馬喜兵衛と初めて勝負をし、これに打ち勝つと村を飛び出した。武芸の力を伸ばし、天下に名を上げ、ゆくゆくは侍大将に、さらには一国の大名になることを夢見て、武者修行の旅に出たのであった。諸国を巡って、いろいろな流派の兵法者と六十数回の勝負を行ったが、一度も敗れていないという。そして、武蔵は慶長十三（一六一二）年、巖流島での佐々木小次郎との一戦によって、名声を天下に鳴り響かせた。まさに兵法者として名を上げたのである。しかしながら武蔵は、戦いを重ねる中で、これまでの自分の人生に疑問を感じ始めていた。試合には勝ち続けていたが心に満足感はなく、ただむなしさだけが残るようになっていた。

「わたしは、ただ目の前の強い相手に勝つことだけを考えてきた。はたして、これでよかったのだろうか。まだまだ、修行を積まなければならない。剣の修行とは自分との戦いなのだ。もっと心を磨かなければ。」

武蔵は、髪を伸ばし身なりも気にせず、ただ「自分の生き方とは何か」、「人生とは何か」を深く考えるようになった。「今までは他の兵法者と比べて、その強い相手に勝って世に認められることこそが自分の生き方だと考えていた。しかし、本当の兵法とは、自分と向き合い、自分の姿をありのままに受け入れ、自分のあるべき姿を求めてひたすら努力することではないのか。」

武蔵は、戦うための兵法ではなく、兵法を通して人生を極める道を探し始めた。自分の生き方を振り返り、心の迷いを捨て、ひたすら自分の道を求めるようになったのである。

寛永十四（一六三七）年のある時、武蔵は、熊本城主細川忠利に招かれることになった。家臣として召し抱えたいというのである。今や熊本の大大名になった細川家が、年老いた自分を迎えてくれるというだけでうれしかった。武蔵

新当流：剣術の流派の一つ。

巖流島（船島）：山口県彦島東岸の離れ島。



佐々木小次郎：生没不詳。福井県今立町で生まれたという説が強い。

細川忠利：江戸時代前期の大名。豊前国小倉藩の代藩主、肥後国熊本藩初代藩主。

は五十歳を過ぎてようやく、落ち着きの場所を得ることができたのである。

「これからは、兵法から学んだものを細川家のために役立てたい。」

武蔵は藩主忠利のもとを訪れては、兵法の話だけでなく、絵や茶道、禅について話すようになった。

「武蔵よ、一つ私に達磨を描いてくれぬか。」

武蔵は忠利から頼まれた達磨の絵を、描いてはみたがなかなかうまく描けなかった。描いては破り、再び描いては破りながら、何日も悩み続けた。武蔵はこの世で最高の達磨を描いて忠利に献上したいと強く思っていた。

眠れぬ日々が続いた武蔵は、床に入ってふと、以前の勝つことだけにこだわっていた頃の自分を振り返った。

「ただうまく描くことを考えるのではなく、わが兵法のままに、心のままに描くことが大事なのだ。」

夜半過ぎ、突然起き上がった武蔵は、灯をともし紙を出し、一気に達磨を描き筆をおいた。武蔵は描きあがった達磨を観た。半眼に開いた達磨の目が、八方をにらみまわしているようだった。

「わしの絵は、兵法に遠く及ばない……と思っていたが……。」

廊下にいた一番弟子の求馬之助は、やがて食い入るように達磨に見入った。達磨が生きているかのように求馬之助をにらんでいる。求馬之助は思わず達磨から目をそらした。恐ろしいまでの絵であると、求馬之助は感じたのであった。

「わかったぞ、求馬之助。始めは忠利様の仰せであり、何としてもうまく描かねばと思う心から、かえって筆の伸びがなく、達磨にはほど遠いものであった。だが昨夜は、わが兵法のままに、心のままに描けたのだ。」

禅：古くからインドで行われる修行方法で、精神を一つの対象に集中し、その真の姿を知ろうとすること。

達磨：中国の僧で、九年間壁に面して座り続け、人間とは何かを自分に問い続けた末、悟りを開いたと伝えられている。

求馬之助は、武蔵の言っている意味が分かったような気がした。

「日が昇ったら城に行く。供をせよ。」

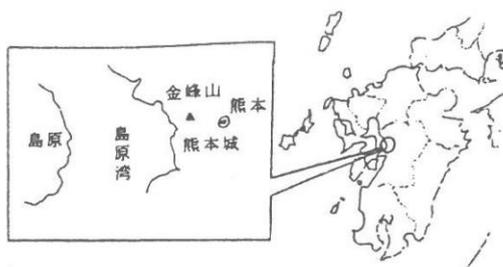
寛永二十(一六四三)年、武蔵は六十歳になっていた。自分の命はもう長くはないと悟った武蔵は、れいがんどう靈巖洞と呼ばれるどうけつ洞穴にこもって、これまで考え続け実践を通して体得してきた自らの兵法をまとめた「ごりんのしょ五輪書」を書いていた。「兵法の道、二天一流と号し…」と、洞窟の冷気を感じ、ロウソクの芯の燃える音を聴きながら筆を走らせていた。書き終わり筆を置くと、武蔵は静かに目をつぶった。



宮本武蔵の略年譜

- | | | | |
|------|-------------------------|------|--------------|
| 一五八四 | 英田郡大原町(現在の美作市大原町)に生まれる。 | 一六三七 | 島原の乱に出陣。 |
| 一五九六 | 初の決闘。兵法者有馬喜兵衛に勝つ。 | 一六四三 | 『五輪書』を書き始める。 |
| 一六〇〇 | 関ヶ原の合戦に出陣。 | 一六四五 | 六十二歳で没する。 |
| 一六一二 | 巖流島(船島)で、佐々木小次郎との決闘。 | | |

靈巖洞…熊本市の西部にある金峰山のふもと。



五輪書…兵法書。地・水・火・風・空の五巻にまとめられている。

話せばわかる ― 犬養木堂 ―

シラカバの木立に囲まれた別荘白林荘の周りを、長い杖をつきながらゆっくり散歩している木堂の姿があった。こは信州・富士見高原（長野県）、八ヶ岳の雄大な峰々が連なり、鳥たちのさえずりがあちらこちらで聞こえる別天地である。大正十四年、政界を退いて一か月あまり、木堂はすでに七十歳の高齢になっていた。近くの石に腰掛けながら、波乱の政治人生を振り返るのだった。

明治二十三年（一八九〇）、我が国で最初の衆議院議員選挙が行われることになり、すでに東京府会議員として活躍していた三十五歳の木堂は、岡山三区の支持者から強い要請を受け、出馬した。木堂の選挙運動はもっぱら立会演説が中心だった。一度に百六十人ほどの聴衆を集め、じっくり半日かけて議会政治の大切さを熱心に説いた。決してうまい演説ではなかったが、聞いている者の心をとらえた。第二回選挙の際には、反対勢力側のいろいろな妨害があった。演説会場や人力車などを使えなくされたり、道をふさがれたり、入場券を暴力で奪われたり……。 「車がなければ歩いていく、会場がなければ辻説法じゃあ。」
しかし、これがかえって岡山三区の良心的な人々の圧倒的な支持を受けることになり、連続十九回もの当選を果たした。

大正十二年（一九二二）九月一日、関東大震災が起こり、その翌日、木堂は逓信大臣となった。そして、郵便貯金

別天地：現実とかけ離れた理想的な場所。

辻説法：道ばたで往来の人に仏法を説くこと。

逓信：郵便、電信などの事務。

通帳を失った人々の善意を信じ、申し出た額がくでの払い戻しを行った。

また、より多くの国民に選出された国会議員による政治の実現のために、普通選挙運動を展開した。そして、大正十四年（一九二五）には二十五歳以上のすべての男子に選挙権が与えられた。女子にはまだ参政権がないという不平等なものではあったが、一気に四倍も選挙人が増えることになった。

木堂は、民衆の立場になって政治を行ってきた。政治人生に悔くいはなかった。

「そろそろ若い者に譲ゆずり、自分は水先案内みずさきでもしよう。」

だが、岡山の支持者たちはそんな木堂を放はなつてはおかなかった。

「今の日本を、私たち民衆を救すくってくれるのは木堂しかいない。」

「私たちの声に耳を傾けてくれるのは木堂しかいない。」

岡山の支持者たちによって、木堂は、再び政治の舞台ぶたいへと担かぎ出だされてしまったが、要職には就つかなかった。



水先案内：船の進むべき水路を案内し導くこと。

昭和四年（一九二九）、木堂は要請され政友会総裁を引き受けた。すでに七十四歳。本来ならば孫とゆったりとした日々を過ごす年齢である。妻の千代子夫人を呼んで、「また苦勞をかけるがよろしく頼む。」と一言だけ言った。しかし、目は若いころのあの熱情で輝いていた。黙ってうなづく妻も木堂の心が痛いほどわかった。だが、内心は心配でたまらない。何よりも木堂の健康が心配だった。地方遊説がとまるのか……。しかし、木堂は妻の心配をよそに、北から南、南から北へと精力的にスケジュールをこなしていった。上野発の寝台特急で青森まで十六時間もかかる時代であったが、自分の生の声を伝えたかった。『木堂来る』の報に、どこの駅でも熱狂的に歓迎された。

昭和六年（一九三一）十二月十二日、天皇から大命が下りた。岡山県初の内閣総理大臣の誕生である。

翌年、政界・財界の要人に対する暗殺事件が相次ぎ、世の中には危険な空気が漂っていた。木堂のもとに防弾チョッキが贈られてきた。「命はいつ捨てても、仕方ないよ。」

木堂の思いとは裏腹に、日本は軍部が軍事力を背景に権力を掌握しようとする暗い時代へと突入していった。ますます強まる社会不安に国民はいらだち、満州国を建てた軍部は発言力を増していった。「政治家に何ができる！」若い軍人たちは血をたぎらせた。

五月十五日（日）、さわやかな朝を迎えた。青空のもと、木堂は庭に出て好きなバラの手入れをし、久しぶりにのんびり過ごした。就任以来、連日の激務だった秘書官や警備の者にも休暇を与えた。千代子夫人も、この日は外出して、家の中はひっそり閑としていた。

政友会：立憲政友会。
当時の与党。

総裁：党派の長として
全体をまとめる人。

遊説：政治家が各地を
演説して回る人。

大命：天皇の命令。

要人：重要な地位にある人。

満州国：昭和七年に
清国の最後の皇帝宣統
帝溥儀を元首として日
本が満州の地（中国東
北部）に建てた帝国で、
第二次大戦の終結ととも
に消滅。

しかし、この時すでに政府のやり方に不満をもつ青年将校たちが首相官邸の襲撃を開始していた。護衛官が飛んできて、金切り声を上げる。

「警官がやられました。逃げてください。早く、早く。」

「なあに、心配はいらぬ。会って話を聞こう。」

木堂は全く動じなかった。そこへ、拳銃を手にした軍人たちが飛び込んできた。

「まあ待て、騒がんでも話せばわかる。撃つのはいつでも撃てる。あちらへ行って話を聞こう。」

「問答無用！」バン、バーン！

木堂は全国の支持者の願いもむなしく、七十七歳の生涯を閉じた。

生家の庭には、初当選を記念して植えられたクスノキが何事もなかったように揺れていた。

犬養毅（木堂）略年譜

- | | | | | | |
|------|-----------------------------|------------------------|------|-----------------------------|---------------------------------|
| 一八五五 | 備中国庭瀬村字川入（現在の岡山市北区川入）に生まれる。 | 一八九〇 | 三五歳 | 第一回衆議院議員総選挙に岡山県三区から立候補し、当選。 | |
| 一八六八 | 十三歳 | 父が病死。 | | 〔以来連続十九回当選〕 | |
| 一八七二 | 十七歳 | 小田県庁地券局（現在の岡山県笠岡市）に勤務。 | 一九二四 | 六九歳 | 加藤内閣の通信大臣。 |
| 一八七五 | 二〇歳 | 上京。共慣義塾を経て、翌年、慶応義塾に転学。 | 一九二五 | 七〇歳 | 五月大臣及び議員を辞職。七月補欠選挙で再選され、余儀なく受諾。 |
| 一八七七 | 二二歳 | 西南戦争の従軍記者として特派され、その現地 | 一九二九 | 七四歳 | 政友会総裁。 |
| | | ルポ「戦地直報」で名声を博した。 | 一九三一 | 七六歳 | 十二月内閣総理大臣に任命され、犬養内閣を組閣。 |
| 一八八二 | 二七歳 | 東京府会議員に当選。 | 一九三二 | 七七歳 | 五月十五日首相官邸で凶徒に襲われ、夜半に死去。 |



官邸：公務を行うための住宅。

道徳科の授業を主体的・対話的で深い学びにしていくために

1 主体的・対話的で深い学びとは

- 道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめる。 ⇒ 主体的な学び
- 物事を広い視野から多面的・多角的に考える。 ⇒ 対話的な学び
- 人間としての生き方についての考えを深める。 ⇒ 深い学び

参考〔第3章 特別の教科 道徳〕の「第1 目標」より

第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

※ _____ は筆者

2 主体的・対話的で深い学びにしていくために

(1) 学習課題を明確にする

ア 道徳的価値に関わる問題とは

道徳的価値が実現されていない。 道徳的価値の理解が不十分
心の弱さをどう乗り越えていくか。 どの価値を優先するか。 など

イ 道徳的価値に関わる問題を生徒の学習課題にしていくために

- ・自分の経験や考え方を出し合う中で、各自の受け止め方の違いから課題意識へと高めていく。
- ・自分の経験や考え方と主人公の生き方との違いから課題意識へと高めていく。

(2) 中心発問で多面的・多角的に考えさせる

ア 多面的・多角的に考えるとは (例)

多面的思考…主として物事を多様な側面から学び合ってより深く本質を探ろうとする思考

多角的思考…主として自分の考えを多角的に伸ばしていくことで見方や考え方を広げていく思考

※道徳で考えると、一人一人が道徳的価値(内容項目)に関わる多様な見方や考え方を出し合い、それを広げたり深めたりしながら、よりよい見方や考え方へと高めていくこと

イ 多面的・多角的に考えさせるための発問の構成

中心発問に焦点化して発問を構成する。

※道徳における中心発問とは、道徳的価値に関わる多様な見方や考え方を出し合いながら、それを広げたり深めたりすることでねらいに迫ることができる発問

ウ 多面的・多角的に考えさせるための活動の工夫

書く活動、話し合う活動、体験する活動等を行う中で、ワークシート、小黒板(ホワイトボード)、短冊カード、ICT機器、役割演技、ディベート等を活用する。

(3) 価値の大切さを自分のこととしてとらえさせる

ア 主人公の言動や気持ちの中から、大切な価値(見方や考え方)を見つけさせる。

イ 見つけた価値をもとにこれまでの生き方を振り返り、自分にとって大切なものとして価値を捉えさせる。

(文責 環太平洋大学 大野光二)

7 参考資料

(1) 犬養木堂

- ・「憲政の神様」

犬養毅は、号を木堂と称し、明治中期から昭和初期にかけて政党政治の確立に貢献した、清廉潔白で非常にすぐれた政治家であった。「話すこと、議すること」を信条とする議会政治家であった。書にも優れ、中国の政治家との親交も深く、情に厚い政治家としても知られている。

- ・ジャーナリストとしての木堂

明治10年(1877年)西南戦争の従軍記者として発信した記事「戦地直報」で記者として名を博す。明治13年(1880年)8月に「東海経済新報」を創刊。明治15年(1882年)に立憲改進黨結成の計画に加わり、ともに、「郵便報知」の有力記者となる。明治16年(1883年)に「秋田日報」主筆となる。明治19年(1886年)朝野新聞に入社、幹部として活躍。

- ・政治家としての木堂

明治23年(1890)第一回衆議院議員選挙で岡山から出馬して当選、以後暗殺されるまで連続19回当選(補選を含む)し、立憲改進黨、立憲国民党、政友会等に所属。この間、大隈内閣の文部大臣、第2次山本内閣の逓信大臣兼文部大臣、加藤内閣の逓信大臣などを歴任した。

- ・五・一五事件

昭和6年(1931年)12月、76歳のとき第29代の首相となり、経済不況、満州事変の収拾などの難局にあたった。しかし、当時は軍国主義の高まる時期で、翌年5月15日、有名な「話せばわかる」という言葉を残し、首相官邸において海軍青年将校の凶弾に倒れた。この犬養首相の死で昭和戦前の政党政治に終止符が打たれた。

(2) 犬養木堂記念館

所在地:岡山市北区川入 102-1 TEL (086) 292-1820 開館時間: 9時~17時 (入館は16時30分まで) 閉館日:毎週火曜日(祝日は除く)、祝日の翌日(土・日は除く)、年末年始 入館料:無料 駐車場:あり

*記念館は木堂の生家の隣に作られている。様々な関連資料が展示されている。動画を観たり、木堂の肉声を聞いたりすることもできる。総合的な学習の時間などに発展させるときも有効に活用できる施設である。

- ・犬養木堂記念館HP <https://inukaibokudo.jp>

(3) 生徒の感想より ~一人一人がよりよく暮らすことができる社会をつくるためには~

- ・暴力や力で問題は解決しないと思うので、犬養さんのように相手の話に耳を傾けるということを大切にしたい。お互いの意見を尊重できるような社会になればいいと思う。
- ・犬養木堂さんを見習ってまず人の意見を聞き入れ、それを活かせるようにしたい。自分ひとりでは判断を誤ることもあるかもしれないし、多くの意見がある方が多くの選択肢が生まれるから。
- ・相手の意見を聞くことだと思う。自分の意見ばかりを押し付けてもあまり良い印象もないし、もし相手がとても良いアイデアを持っていたらもったいないと思うから。
- ・よりよいものをつくるにはいろんな意見を聞くべき。だから普段から人の話に耳を傾けたい。
- ・意見が相手と異なっても、否定するのではなく自分の考えも伝えて相手の意見を尊重することが大切だと思う。
- ・自分の考えや意見などを暴力的に伝えるのではなく、きちんと言葉にして伝えること。
- ・自分の考えだけを相手に押し付けるのではなく、きちんと相手の意見も聞いて双方が納得いくような解決を目指すこと。
- ・よりよく暮らすことができる社会は温かい社会だと思うので、人との交流を大切に、挨拶をしたり、喧嘩したときも言葉で解決したりする。

(4) 参考文献

- ・『話せばわかるー犬養毅とその時代ー』(山陽新聞社)
- ・『新聞記事と写真で見る世相おかやま』(山陽新聞社)
- ・『(マンガ) 犬養木堂』南一平 画(岡山県郷土文化財団)
*山陽新聞社刊「学習漫画岡山の歴史第15巻より抜粋編集したもの。
- ・『(ビデオ) 犬養木堂』(岡山県郷土文化財団)

6 学習指導過程

○は基本発問 ◎は中心発問

学習活動	主な発問と生徒の反応	指導上の留意点
1 犬養木堂について話し合い、本時のめあてをつかむ。	○ 犬養木堂についてのアンケート結果から、どのような印象をもったか。 ・ 明治時代に活躍した人 ・ 岡山県(岡山市)出身の政治家 ・ 岡山県初の内閣総理大臣 ・ 憲政の神様と呼ばれるほど優れた政治家だった。 ・ どんな生き方をした人なのか詳しく知りたい。	・ 事前にアンケートを実施し、生徒のレディネスを把握しておく。 ・ 端末のアンケート機能による事前アンケートの結果を紹介し、「犬養木堂」の現時点での認識を共有させる。
木堂の生き方から何を学ぶことができるか考えよう。		
2 教材「話せばわかる―犬養木堂―」を読んで、木堂の生き方について考え話し合う。 (1) 木堂が総裁を引き受けた理由 (2) 軍人が襲撃した際の行動	○ 一度は引退した木堂が、総裁を引き受けたのはなぜだろう。 ・ 多くの人々が自分を信頼してくれたから。 ・ 自分が理想とする民主的な政治を行いたいから。 ・ もう少し民衆のために働こうと考えたから。 ・ 一人一人がよりよく暮らせる社会を実現したいと考えたから。 ◎ 木堂の生き方は無駄だったのだろうか。木堂はなぜ「話せばわかる」と言って青年将校に対応したのだろうか。 ・ 木堂の生き方は間違っていない。自分の思いや理想を分かってもらいたいから話し合おうとした。 ・ 自分とは考えが異なる人の話をまず聴くことが大切だと考えていた。 ・ 腹を割って話せば、きっと理解し合うことができると考えていた。 ・ 自分なら死の恐怖で逃げてしまうので、木堂の信念に基づいた行動はすごいと思う。	・ 木堂は民主政治を目指したが、五・一五事件によって志半ばで暗殺されたことを押さえる。 ・ ワークシートに総裁を引き受けた理由について記入させ、自らの考えの根拠を明確にさせる。 ・ 端末を使って回答させることで、学級全体で意見を共有できるようにする。 ・ 死を覚悟しながらも一人一人がよりよく暮らすことができる社会の実現を目指していた木堂の生き方に共感できるようにする。 ・ 一人一人がよりよく暮らすことができる社会をつくるためには、自分たちができることについて考え、行動することが重要であることを押さえる。
3 木堂の生き方から学んだことを今後の生活にどう生かしていくか考え話し合う。	○ 一人一人がよりよく暮らすことができる社会をつくるために、今自分たちができることは何だろう。 ・ 木堂のように相手の話に耳を傾けることを大切にしたい。 ・ 自分のことだけを考えるのではなく、みんなのことを考えて行動したい。 ・ クラスの中やまわりで困っている人を助けたい。 ・ クラスでの話し合いや生徒会の活動にも積極的に参加したい。	・ 一人一人がよりよく暮らすことができる社会をつくるためには、自分たちができることについて考え、行動することが重要であることを押さえる。
4 まとめをする。	○ よりよい社会をつくるために身近で小さなことから実践している活動を紹介する。	・ 木堂の意思を受け継ぐためにも、まずは身近な実践から始めていこうという意欲につながるようにする。
評価の視点	・ 話し合い活動を通じて、犬養木堂の生き方について考え、理想の社会の実現を目指して前向きに生きることの素晴らしさに気付くことができたか。 ・ 私たちが暮らす社会に目を向け、一人一人がよりよく暮らすことができる社会の実現に向けて、自分たちができることから実践しようとする意欲をもつことができたか。	

1 主題名 社会連帯の自覚〔C 社会参画、公共の精神〕

2 ねらい

死に直面しても、一人一人がよりよく暮らすことができる社会の実現を目指した犬養木堂の生き方を通して、自分が理想とする社会の実現を目指して前向きに生きることの素晴らしさに気づき、よりよい社会の実現に向けて、自分たちができるところから実践しようとする態度を養う。

3 主題設定の理由

(1)内容項目について

本時で取り上げる内容項目は、C社会参画、公共の精神「社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、公共の精神をもってよりよい社会の実現に努めること」である。

一人一人の個性を尊重し民主的な社会を築くためには、社会を構成する多くの人々と助け合い励まし合いながら社会連帯を深めることが求められる。「社会連帯の自覚」とは、社会生活において、一人一人が共に手を携え、協力し、誰もが安心して生活できる社会をつくっていかうことである。

第1学年では、自分も社会の一員であるという自覚をもって、積極的に協力し合おうとする態度を養っていききたい。

(2)生徒の実態について

本学級の生徒は、時事的な出来事についての関心が比較的高く、よりよい社会を協力して築こうとする態度が少しずつ育ってきている。しかし、出身小学校が多岐に亘っていることもあり、人間関係が成熟しておらず、他者に対する配慮を欠き、公の場で自己中心的な言動をとってしまうこともある。

そこで、人間としての生き方や社会のあり方について深く考えることで、よりよい民主的な社会を実現するために、積極的に協力し合おうとする意欲を育てていきたい。

(3)教材について

本教材は、「憲政の神様」と呼ばれ、明治・大正・昭和の激動期を政治一筋に生きた犬養木堂の生涯を取り上げたものである。

様々な妨害にも屈しないで、平和で平等な社会の実現を目指した木堂の生き方に共感できるようにし、このような木堂の生き方から学んだことを今後の生活にどう生かしていくか考える問題解決的な学習を通して一人一人がよりよく暮らすことができる社会の実現に向けて、自分たちができるところから実践しようとする意欲をもつことができるようにしたい。

4 板書例

<p>○一度は引退した木堂が、総裁を引き受けたのはなぜだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多くの人が自分を信頼してくれたから ・理想とする民主的な政治を行いたいから ・一人一人がよりよく暮らせる社会を実現したいから <p>◎木堂の生き方は無駄だったのだろうか。木堂はなぜ「話せばわかる」と言って青年将校に対応したのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木堂の生き方は間違っていない。 ・自分の思いや理想を分かってもらいたい。 ・考えが異なる人の話をまず聴くことが大切だ。 ・自分なら死の恐怖で逃げてしまうので、木堂の信念に基づいた行動はすごい。 <p>○一人一人がよりよく暮らすことができる社会をつくるために、今、自分ができることは何だろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の話に耳を傾けることを大切にしたい。 ・自分のことだけでなく、みんなのことを考えて行動したい。 <p>・クラスでの話し合いや生徒会の活動にも、積極的に参加したい。</p>	<p>「話せばわかる」 — 犬養木堂 —</p> <div style="border: 1px solid black; width: fit-content; margin: 10px auto; padding: 5px;">犬養木堂 (写真)</div>	<p>めあて</p> <p>木堂の生き方から何を学ぶことができるか考えよう。</p> <div style="border: 1px solid black; width: fit-content; margin: 10px auto; padding: 10px; text-align: center;"> スクリーン (アンケート結果や発問等を表示) </div>
--	---	---

5 他の教育活動との関連

社会科【歴史的分野】(近代の日本) 【公民的分野】(民主政治)
総合的な学習(キャリア教育)

7 参考資料

(1) 宮本武蔵について

(ア) 謎に包まれた人

武蔵のありのままの姿はあまり知られておらず、小説「宮本武蔵」を書いた吉川英治も「武蔵について分かっていることを漢字の文でつづったら、百字で足りてしまうだろう。」と述べたとされている。実際、確かな資料が少ない人物であり、武蔵の生涯について確実に知られているのは晩年の数年間のみで、両親のことさえ謎に包まれている。

(イ) 武蔵の生涯

少年時代には姉や兄と離れ、孤児のような状況であった武蔵は、寺に預けられた。このことが独立心を早く目覚めさせたとも考えられている。武蔵の生涯は、佐々木小次郎と巖流島で決闘するまでの青年期、諸国をさすらって回った壮年期、そして熊本で静かに暮らした晩年期に分けられる。武芸によって名声を得た武蔵は、壮年期から晩年期にかけて、自分自身の人生について深く考えるようになった。

(2) 『五輪書』について

この書は、武蔵が二天一流と称する兵法の道について、寛永20（1643）年10月上旬から正保2（1645）年5月12日の間に書かれた。そして、この書を書き上げて7日後に宮本武蔵は亡くなっている。「五輪」とは、仏教による「宇宙を形成する五要素」のことであるとされている。

- 地^ち之巻・・・基本的な心構えと考え（修行するということ）
- 水^{すい}之巻・・・二天一流の剣法（基本的な動き・心構え）
- 火^か之巻・・・戦うときの心構え（いかにして有利な状況を作るか）
- 風^{ふう}之巻・・・他流との比較（基本の大切さ）
- 空^{くう}之巻・・・修行を積んだ後の姿（自由自在な心技体）

(3) 「万理一空」について

どんなに遙か遠くまでいっても空は一つであり、すべてのものは一つの世界に留まっているという意味。物事を冷静に捉え精神の修養、身体の鍛錬を究めること、掲げた一つの目標を見据え、絶えず努力を続けることの大切さを説いている。

(4) 参考文献

- ・『宮本武蔵』 浜野卓也（ポプラ社文庫）
- ・『宮本武蔵』 小暮正夫（講談社 火の鳥伝記文庫）
- ・『剣聖武蔵伝』 菊池寛（未知谷）
- ・『宮本武蔵の「五輪書」』 童門 冬二（PHP）
- ・『五輪書』 宮本武蔵・渡辺 一郎校注（岩波文庫）

6 学習指導過程

○は基本発問 ◎は中心発問

学習活動	主な発問と生徒の反応	指導上の注意点
<p>1 充実した生き方について考え、本時のめあてをつかむ。</p>	<p>○ 充実した生き方とはどんな生き方だと思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 好きなことや楽しいことをたくさんする。 仲の良い友達と多くの時間を過ごす。 部活の大会で勝って優勝する。 自分の目標に向かってチャレンジする。 	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりの受け止め方の違いをもとに、楽しいことだけが充実した生き方ではないことから学習課題へ繋ぐようにする。
<p>充実した生き方をするために大切な気持ちを考えよう。</p>		
<p>2 教材「わが兵法のままに」を読んで話し合う。</p> <p>(1) 吉岡家に戦いを挑んでいた頃の武蔵の気持ち</p> <p>(2) 自分の人生に疑問を感じ始めていた頃の武蔵の気持ち</p> <p>(3) 最高の達磨を描き上げた時の武蔵の気持ち</p> <p>3 充実した生き方について、これまでの自分を振り返る。</p> <p>4 まとめをする。</p>	<p>○ 吉岡家に戦いを挑んでいた頃の武蔵の兵法は、どんなものだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 名を上げるには勝つことが大切だ。 どんな手を使ってもよいから勝てる方法を考えよう。 下調べをしっかりと相手の隙をつこう。 <p>◎ 兵法者として名を上げたにも関わらず自分の人生に疑問を感じ始めていた頃の武蔵は、どんなことを考えていたのだろうか。</p> <p>〔疑問〕</p> <ul style="list-style-type: none"> 勝ち続けているのになぜむなしさを感じるのだろうか。 どうすれば満足感を得られるのだろうか。 戦いに勝つことだけが人生のすべてなのだろうか。 <p>〔反省〕</p> <ul style="list-style-type: none"> 今までは強い相手に勝つことだけを考えていた。 勝敗だけにこだわるのではなく真の強さを求めなければならぬ。 いろいろな手を使って勝っても満足しないのは、心が抜けているからだ。 相手に勝つだけで武芸を究めることはできない。 <p>〔決意〕</p> <ul style="list-style-type: none"> 物事を冷静にとらえて正々堂々と戦うべきだ。 鍛錬をきわめて心に迷いのないことが大切だ。 心を磨き心を鍛え人間として大きく成長しよう。 <p>○ 最高の達磨を描き上げることで、武蔵は何に気付いたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> これまで自分が培ってきた兵法がこの絵の中に生きている。 何事にも動じず心のままに描くことが大切だ。 <p>○ 充実した生き方をするために、よりよい自分を目指して努力しようという気持ちが心の中にどれだけあったか振り返ってみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> もっと自分を高めたいという気持ちはあったが努力が足りなかった。 よりよい自分になれるよう、少しずつだけど努力している。 <p>○ 修行によってたどりついた宮本武蔵の思いについて紹介する。(向上心と関連させて)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 宮本武蔵の功績について触れておく。 手段を選ばず敵に勝つことだけに価値を見出していた気持ちを押さえておく。 ワークシートに書いた自分の考えを元にグループで話し合うようにする。 話し合ったことをホワイトボード等を使って全体の場に出し合わせ、揺れ動く多様な気持ちを受け止めることができるようにする。 悩んだ末に何を見出すことができたのか考えることで、心を磨き人間として成長しようとする気持ちの大切さを意識できるようにする。 自分の心の中にある将来に向かって自らを向上させようとする気持ちを意識できるようにする。 『兵法三十五ヶ条』の中の「万理一空」を提示し、実践への意欲につなげる。
<p>評価の視点</p>	<ul style="list-style-type: none"> グループや全体での話し合いを通して多様な考えを出し合い、よりよい自己を目指して前向きに努力しようとする気持ちの大切さに気付くことができたか。 自分を振り返り、自己を見つめ自己の向上に向けて努力しようとする意欲を高めることができたか。 	

1 主題名 充実した生き方を求めて [A 向上心、個性の伸長]

2 ねらい

充実した生き方をする上で大切な気持ちを考える中で、よりよい自己を目指して前向きに努力しようとする気持ちの大切さに気づき、自己を見つめ自己の向上を図ろうとする態度を養う。

3 主題設定の理由

(1)内容項目について

本時で取り上げる内容項目は、A 向上心、個性の伸長「自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求すること」である。

自分を静かに見つめ直すことは、自己の向上を願って生きていく上で重要なことである。自己を見つめる中で、向上心が起こるのである。この時思い描く自己像は、自他の行為における関係の中で意識されるものである。自己という概念は、他者との関係において、初めて規定されるともいえる。

第2学年では、自己を見つめることを通してよりよい生き方について、自らを向上させようとする態度を養っていききたい。

(2)生徒の実態について

本学級の生徒は、授業や学校行事に積極的に取り組む生徒が多く、ペア活動やグループ活動といった協働的な学びにも意欲的である。しかし、個々の生徒を観察すると、自分自身が活躍でき、達成感を感じているものの、何か物足りなさを感じたり、思うように成果が出ずに行き詰まったりしている生徒もいる。

そこで、充実した生き方をするためには、現状に満足せずに自己を振り返りながら、挫折や失敗を乗り越えて成長させていこうとする態度が大切であることや、自己を成長させることが幸福感や自信をもたらし、自分自身の人生や人間関係を豊かにすることに気付かせたい。

(3)教材について

本教材は、『五輪書』という兵法の書を書いた宮本武蔵が「人生いかに生きるべきか」を考える際の心の葛藤を描いたものである。勝つことだけにとらわれていた自分に虚しさを感じ、自己を見つめ自己のあるべき姿を求め続けた武蔵の生き方を通して、よりよい自己を目指して前向きに努力しようとする気持ちの大切さに気づかせたい。

4 板書例

めあて
充実した生き方とはどんな生き方なのか考えよう。

わが兵法のままに 宮本武蔵

宮本武蔵像

○吉岡家に戦いを挑んでいた頃の武蔵の兵法

- ・ 名を上げるためには勝つことが大切。
- ・ 下調べをしっかりと行って相手の隙をつこう。

グループの意見	グループの意見
グループの意見	グループの意見

○自分の人生に疑問を感じ始めていた時の武蔵の気持ち

《苦悶》

- ・ なせむなしさを感じるのか。
- ・ どうすれば満足感を得られるのか。
- ・ 戦いに勝つことだけが人生のすべてなのだろうか。

《反省》

- ・ 今までは強い相手に勝つことだけを考えていた。
- ・ 勝敗にだけにとらわれず真の強さを求めなければならぬ。
- ・ 相手に勝つことだけで武藝を究めることはできない。

《決意》

- ・ 物事を冷静にとらえて正々堂々と戦うべきだ。
- ・ 心に迷いがなくことが大切だ。
- ・ 心を磨き心を鍛え人間として大きく成長しよう。

●充実した生き方にするために

よりよい自己を目指して努力しようという気持ちがあったかどうか振り返ってみよう。

修行によってたどりついた宮本武蔵の思い

「万理一空」の理について

5 他の教育活動との関連

体育科 (剣道)

7 参考資料

(1) 資料に関連して

- ・岡山県の矢掛町から倉敷市真備町にかけての小田川流域一帯は吉備真備ゆかりの地であり、真備の遺徳をしのいでそれぞれの記念公園を造っている。また、倉敷市真備町にある「まきび記念館」には、吉備真備の関連資料が展示してあり、真備の業績に触れることができる。
- ・吉備真備は歴史上有名な人物ではあるが、教科書等に詳しく触れられていないこともあり、知らない生徒も多い。また、揺れ動く古代律令制社会の中で政治に関与していたこと、伝説が多いことなどから、その人物像には、様々な見方がある。ここでは、「吉備真備」を、困難や逆境の中でも勇気と希望をもって前向きに生きた人物としてとらえ、現在に共通するものを学びとらせたい。

(2) 現在のわれわれが「吉備真備」から学ぶこと

吉備真備は、単なるロマンチストではなかった。現実に立脚して道理を解く人であり、道理にかなった行動をする人であった。事に当たってスタンドプレーはなく、華やかさもなかった。情熱を内に秘めた極めて勤厳実直で清廉な政治家であるとともに、儒教に裏打ちされた地味な教育者であり文化人であった。そのような真備の人柄を考えるキーワードとして、次の5つの言葉を設定して見たのだが、いかがであろうか。

その一つは、「進取」。困難で危険な航海が待ち受ける遣唐留学に進んで挑戦し、先進地の唐の文化を日本にもたらすとともに、遣唐副使としても積極的に参加し、日中交流に努めた。

その二つは、「勤勉」。優れた頭脳に加え、その勤勉さによる勉学の成果が遣唐留学生の選任に結びついたし、唐に渡ってからは、唐の人々も認めるような勤勉さで、その勉学は極めて多方面に及んだ。

その三つは、「忍耐」。藤原仲麻呂に嫌われて藤原広嗣の怨霊の残る筑前守、ついで肥前守に左遷されながらも耐え忍び、太宰府に左遷された時も自暴自棄にならず、日本の防衛のために数々の業績をあげた。

その四つは、「清廉」。醜い政争にくみすることなく、ひたすら日本の国を思い、官人の誤りや綱紀を正し、民の声を朝廷に反映させるなど終始清廉な政治を貫いた。

その五つは、「謙虚」。豊かな学識を持ちながら決して驕(おご)ることなく、また、右大臣という頭官に昇りながら常に謙虚に対処し、右大臣を辞任する時も謙虚な姿勢が見られてさわやかな印象を与えた。

真備は進取の人、勤勉の人、忍耐の人、清廉の人、謙虚の人であった。人を裏切ることのない人であった。「人間への信頼」を根底においた誠実そのものの人柄であった。現在のわれわれがそんな吉備真備から学ぶことは極めて多いのではないだろうか。

(高見茂著『吉備真備－天平の光と影－』より)

(3) 参考文献等

- ・『吉備真備－天平の光と影－』高見茂 (山陽新聞社)
- ・『吉備真備物語』荒木栄悦 (善本社)
- ・『まきびのまきび』(吉備真備絵本編集委員会・真備町教育委員会)
- ・まきび記念館 (吉備郡真備町)
- ・マービーふれあいセンター (吉備郡真備町)
- ・矢掛町産業課

6 学習指導過程

○は基本発問 ◎は中心発問

学習活動	主な発問と生徒の反応	指導上の留意点
<p>1 目標に向かって取り組む姿勢について話し合い、本時のめあてをつかむ。</p>	<p>○ 自分にももっと粘り強くやり遂げる力があればよいなと思ったことがあるか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語が上手に話せるようになりたくて英会話教室に通ったが、途中でやめてしまった。 ・もっと野球が強くなりたくて自主練習を始めたが長くは続かなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な経験を出し合う中で、やり遂げたいという気持ちはあるがなかなか難しいことから、学習課題を意識できるようにする。
<p>物事を粘り強くやり遂げるためには、どんな気持ちが必要なのか考えよう。</p>		
<p>2 教材「荒波を乗り越えて」を読んで話し合う。</p> <p>(1) 初めて唐に渡ろうと決心したときの真備の気持ち</p> <p>(2) 再び唐に渡ろうという手紙が届いたときの真備の気持ち</p>	<p>○ 真備は、どんな思いで唐への一度目の渡航を決めたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本物の学問を学ぶよいチャンスだ。 ・もっと勉強しているいろいろなことを知りたい。 ・留学生として立派に責任を果たしたい。 <p>◎ 遣唐副使として再び唐に行くようにという手紙が届いたとき、真備はどんなことを思ったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・唐でもう一度学びたいが、危険な航海なので再び帰って来られるかどうか不安だ。 ・歳をとっているのでは大丈夫だろうか。 ・帰ってこれなければ、せっかく学んだことを生かすことができない。 ・この国には苦しい思いをしている人たちがたくさんいる。 ・政治の仕組みを整え、人々が安心して暮らせる国づくりをしなければならない。 ・国を変えていくのが自分の使命だ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「真備町」の出身で、岡山県にかかわりの深い人物であることを知らせる。 ・不安を感じながらも、もっと学問を究めたいという前向きな気持ちを押さえるようにする。 ・グループワークを取り入れ、真備の心の中をしっかりと考えさせることで、多様な気持ちを出し合えるようにする。 ・出し合った気持ちをもとに、心の葛藤がある中で再び唐に行こうと決意したのはなぜか考えることで、人々が安心して暮らせる国へと変えていくことが自分の使命だと考えた意志の強さに気づくことができるようにする。
<p>3 自分を振り返り、粘り強くやり遂げるために必要な気持ちについて考える。</p> <p>4 まとめをする。</p>	<p>○ 粘り強くやり遂げるために、今の自分にどんな気持ちを取り入れたいと考えているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・くじけないで前に進もうとする気持ち ・目標を達成させようという強い意志 ・人のために役にたきたいという気持ち。 <p>○ ワークシートに書いた気持ちを紹介しよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教材を通して学んだどんな気持ちを取り入れたいか、これまでの自分を振り返りながら考えることで、実生活に生かすことができるようにする。
<p>評価の視点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ活動等を通して多様な考えを出し合い、生涯をかけての理想や目標に向けて努力し続けようとする強い意志が必要なことに気付くことができたか。 ・これまでの自分を振り返り、自分の目標に向かって絶えず挑み続けようとする意欲を高めることができたか。 	

1 主題名 困難や失敗を乗り越えて [A 希望と勇気、克己と強い意志]

2 ねらい

物事を粘り強くやり遂げるためにはどんな気持ちが必要なのか考える中で、困難や失敗に直面しながらも、生涯をかけての理想や目標に向けて努力し続けようとする強い意志が必要なことに気付き、自分の目標に向かって絶えず挑み続けようとする態度を養う。

3 主題設定の理由

(1)内容項目について

本時で取り上げる内容項目は、A 希望と勇気、克己と強い意志「より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気を持ち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること。」である。

人生において、目標の実現には「希望」や「勇気」という積極的な気力が必要である。困難や失敗を経験することは多々あるが、それを乗り越えて目標に向かって努力し続けるには、希望と勇気を失わない前向きな姿勢や、失敗にとらわれない柔軟でしなやかな思考、自分自身の弱さに打ち克って着実にやり遂げようとする強い意志などが大切であると考えられる。

第2学年では、困難に直面してもくじけず、目標達成に向けて勇気と希望をもちながら、常に挑み続けようとする態度を養っていききたい。

(2)生徒の実態について

本学級の生徒は、自分の好むことや価値を認めたものについては意欲的に取り組む態度が育ってきている。しかし、自分に自信のない生徒も多く、困難や失敗に直面すると物事を簡単にあきらめてしまったり、挫折や失敗を見せないようにしたりそれらを回避したりしようとして、安易な選択をしてしまったりする生徒も見られる。

そこで、生徒の努力を評価しながら、目標を達成するためには、どんなことがあっても最後まで強い心を持ち続けることが高い壁を越える力になるということに気づかせ、困難や失敗にもくじけず希望と勇気をもって挑み続けようとする前向きな姿勢を培っていききたい。

(3)教材について

本教材は、平安時代に活躍した「吉備真備」の生き方を取り上げたものである。

吉備真備は身分の低い家庭に生まれ育ちながら、まっすぐに学業にいそしみ、その能力とやる気を買われ、遣唐使として唐へ渡る。先進の文化や政治経済に触れ、日本に持ち帰り、新たな日本を作っていく。その後、有力者のねたみから左遷されて不遇な生活を送るが、自分の目標や理想を達成するため再び唐へ渡り、命をかけて国づくりに尽力した。

その生き方を通して、困難や失敗に直面しながらも自分の理想や目標に向けて強い意志をもって乗り越えていくことの大切さについて考えさせたい。

4 板書例

<p>○ 粘り強くやり続けるために今の自分に 取り入れたこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・くじけないで前に進もうとする気持ち ・目標を達成させようという強い意志 ・人のために役立ちたいという気持ち 	<p>○ 再び唐へ渡ろうという手紙が届いたとき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・危険な航海なので帰って来られるか不安だ。 ・歳を取っているので体が心配だ。 ・学んだことを生かせないかもしれない。 ・多くの人が苦しんでいる。 ・人々が安心して暮らせる国にしなければ ・国を変えていくのが自分の使命だ。 	<p>○ 初めて唐に渡ろうと決心したとき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本物の学問を学ぶよいチャンスだ。 ・もつと勉強していろいろなことを知りたい。 ・留学生として立派に責任を果たしたい。 	<p>もつと粘り強くやりとげる力があればいいな と思ったこと</p> <p>めあて</p> <p>粘り強く物事をやりとげるには、どんな気持ち が必要なのか考えよう。</p>
---	---	--	--

5 他の教育活動との関連

社会科 [歴史的分野] (遣唐使)

(イ) 「能く働き、能く食べ、能く眠る」

幸助が、家庭学校で大切にしてきたことの一つが「能く働き、能く食べ、能く眠る」という「三能主義」である。汗を流して一生懸命働き、しっかり食べてよく眠る、このような健康的な生活を送ることで、心身ともたくましく生きていく力を身に付けさせようとした。家庭学校では、野菜を育てたり、牛や馬の世話をしたり、農地を整備したりする仕事を少年たちで分担して行い、自分たちが一生懸命働いた成果を実感することで、やりがいを感じられるようにした。

(ウ) 家庭的な雰囲気の中に

夫婦の職員が舎監となり、少年たちと共に生活することで、家庭的な雰囲気のもと少年たちが安心して過ごせるようにした。不遇な境遇のもと非行の道へ進んでしまった少年たちに愛情が注がれ、一人の人間として大切にされているということが実感できる環境にすることが大切にされた。

(3) 高梁基督教会堂（県指定史跡）

明治22（1889）年9月に建てられ、現存する岡山県内最古の教会堂で、プロテスタント教会としては、全国でも同志社大学のチャペルについて古い教会堂である。

明治13（1880）年に新島襄が高梁で布教活動を行ったことを契機として、明治15（1882）年、地元出身の教育者福西志計子や医師赤木蘇平ら16人が原動力となって教会組織が設立され、その7年後に活動の拠点となる教会堂が完成した。

(4) 参考文献

- ・『教育農場五十年』 留岡清男（岩波書店）
- ・『川上重治写真集 家庭学校と留岡清男』川上重治（北海道新聞社）
- ・『福祉の国を創った男 留岡幸助の生涯』藤井常文（法政出版）
- ・『慈愛と福祉 岡山の先駆者たち1』公益財団法人山陽放送学術文化財団編（吉備人出版）
- ・『留岡幸助の研究』室田保夫（不二出版）
- ・『留岡幸助と備中高梁 石井十次・山室軍平・福西志計子との交友関係』倉田和四生（吉備人出版）
- ・『高梁市歴史的風致維持向上計画（第2期）』（高梁市 産業経済部 観光課 日本遺産・歴まち推進室）
- ・山陽新聞 2022年2月12日版 記事 「高梁基督教会 今も輝く新島襄の教え」
- ・社会福祉法人北海道家庭学校
<https://kateigakko.org/new/index.html>
- ・えんがる歴史物語（遠軽町役場 経済部 商工観光課）
<http://story.engaru.jp/>

7 参考資料

(1) 人物について

(ア) 留岡幸助

元治元（1864）年、高梁市新町に生まれる。商家留岡家に養子に入り、12歳で行商人の仕事を手伝う。その頃、肺ジストマにかかり、キリスト教信者で医師の赤木蘇平宅で治療を受けた。その間、留岡は赤木の人柄や、「神の前では士族も町人も同じ価値をもっている」というキリスト教の教えに感化され、キリスト教の信者となった。明治15（1882）年、17歳で高梁^{キリスト}基督教会の洗礼を受け、その後、教会員の援助により同志社英学校別科神学科に進学する。

同志社英学校では、「同志社は、世の中への奉仕を自分の使命とする人材を送り出すためにある。自由、愛、希望、そして自己犠牲の精神をもって、社会的に弱い立場の人々のために尽くせ。」という新島襄の教えを受ける。

それまでの監獄は罰を与えるところという一般的な考え方から、19世紀末、欧米の監獄改良家たちは、「監獄で受刑者は過去について罰せられ、将来に備えて訓練されるべきであり、監獄の職員の仕事は、人間の内面に働きかけ、それを伸ばさせ成長させる点で教育の仕事だ」と考えた。幸助は、各国の監獄改良家の考えに触れ、監獄改良についてさらに深く学びたいと考えるようになった。

明治27（1894）年、アメリカに渡り、2年間で150余りの監獄や施設を視察した。その中で、子どもたちの施設では、女性の職員の役割が大きいこと（当時の日本では、男性職員のみで指導にあたっていた）、自然が豊かなところに設置され、1日のうち教科学習と作業学習を行う生活を通して、子どもたちを育てていることを知る。また、ドイツ人ヴィッヘルンの「問題行動をした子どもたちを処遇する感化院に、塀とか鍵とかは要らない、むしろ大切なのは愛情なのだ」という考え方に影響を受け、のちに家庭学校設立の際の理念となった。

(イ) 新島襄

アマースト大学を卒業。岩倉使節団に随行し、欧米の教育制度を視察。帰国後、京都に同志社英学校（後の同志社大学）を創立。キリスト教精神に基づく教育に専念した。

明治13（1880）年には高梁を訪問。高梁のキリスト教の布教活動が加速する。

(2) 北海道家庭学校について

(ア) 設立の経緯

明治32（1899）年、幸助は東京、巢鴨に家庭学校を設立した。このとき校名に「感化院」という言葉を使わず「家庭学校」と名付けたのは、「感化院」という響きは「監獄の子ども版」を連想させ、世間の冷たいまなざしを避け、少年たちに卑屈な思いを抱かせないためであり、また、つまづいた子どもたちに真に必要なのは、監獄ではなく家庭や学校であるという強い思いがあったからである。

巢鴨の家庭学校の設立を経て、幸助は豊かな自然環境の中で、教育を行うことの重要性を改めて実感した。土に触れ、野菜を育てたり、牛や馬の世話をしたりすることは、少年たちの心を落ち着かせ、労働への意欲をかき立て、自然に勤勉さを身に付けることにつながると考えた。さらに、農業をすることで自立した生活を営むことを目指した。目指す家庭学校の姿を実現するためには、北海道の大自然がふさわしいと考え、大正3（1914）年、家庭学校北海道農場・社名淵分校として北海道家庭学校が開設された。

6 学習指導過程

○は基本発問 ◎は中心発問

学習活動	主な発問と生徒の反応	指導上の留意点
<p>1 差別や偏見について感じたことを出し合い、本時のめあてをつかむ。</p>	<p>○ 日々の暮らしの中やニュースなどで、差別や偏見だと思うことにはどんなことがありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症にかかった人が差別されたり、偏見をもって見られたりしている。 ・ネットへのひどい書き込みや嫌がらせが増えている。 ・ジェンダーに関わる偏見や不平等がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事等で話題になったことなども取り上げ、差別や偏見が実際には身近にあるという現実を捉え、学習課題として意識付けるようにする。
<p>差別や偏見のない社会を実現するためにはどんな見方が大切なのか考えよう。</p>		
<p>2 教材「社会福祉の先覚者」を読んで話し合う。</p> <p>(1) 罪人の心の支えになりたいといった幸助の気持ち</p> <p>(2) 家庭学校で少年たちと接していた幸助の気持ち</p> <p>3 差別や偏見についてこれまでの自分を振り返る。</p> <p>4 まとめをする。</p>	<p>○ 「罪人の心の支えになりたい」といった幸助はどんなことを考えていたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・罪を犯したからといって、人間としてひどい扱いを受けるのはおかしい。 ・生まれつきの悪人なんていないし、きっかけがあれば改心できる。 ・この現実を放っておいてはいけない。自分の力でなんとか改善したい。 <p>◎ 北海道にある家庭学校で、幸助はどのような思いをもって少年たちと接していたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世間の偏見からこの子たちを守らなければいけない。 ・悪い人間だと決めつけてはいけない。 ・何とか少年たちが立ち直れるよう力になりたい。 ・家庭的な雰囲気の中で、家族のように大切にしたい。 ・社会の中でこの子たちが力を発揮できるようにしていきたい。 ・一面だけを見て判断するのではなく、この子たちのよさや可能性に着目して伸ばすことが大切だ。 <p>○ 差別や偏見をなくすために大切だと思ったことをこれからの生活のどんな場面で生かしていきたいか、これまでの自分を振り返りながら考えてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友だち関係で、嫌なことがあってもそれだけに着目するのではなく、その人のよさや頑張っていることにも着目したい。 ・ネットでの書き込みや人のうわさに惑わされるのではなく、よく確認してから判断するようにしたい。 <p>○ 差別や偏見をなくすために身近なことから実践している教師の体験を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・留岡幸助の功績について触れておく。 ・「罪人だから」と決めつけている世間の見方に対して不公平感を抱いていることを押さえる。 ・子どものころに幸助が感じた身分差別の不合理が土台になっていることに触れるようにする。 ・幸助の気持ちをワークシートに記述することで自分の考えをもって話し合いに臨めるようにする。 ・グループで話し合ったことを全体で共有する。 ・出し合った気持ちの中から、差別や偏見をなくすにはどんな見方がより大切なのか話し合うことで、一面のみを捉えて偏った見方をするのではなく、少年たちのいろいろな面を認め伸ばそうとしていることに焦点化できるようにする。 ・具体的な場面を思い浮かべながら、なぜそう思うのか考えることで、差別や偏見についてのこれまでの自分の意識を振り返ることができるようにする。 ・実践への取組を語ることで、意欲付けとする。
<p>評価の視点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・グループや全体での話し合いを通して多様な考えを出し合い、その人の一面だけでなく全体の姿を見極めて正しく判断しようとする気持ちの大切さに気付くことができたか。 ・自分を振り返り、差別や偏見をなくして公正な社会の実現に向けて自分にできることから実践しようとする意欲をもつことができたか。 	

1 主題名 差別や偏見をなくするために〔C 公正、公平、社会正義〕

2 ねらい

差別や偏見のない社会を実現するためにはどんな見方が大切なのか考える中で、その人の一面だけでなく全体の姿を見極めて正しく判断しようとする見方の大切さに気づき、差別や偏見のない社会の実現に向けて自分のできることから実践しようとする態度を養う。

3 主題設定の理由

(1)内容項目について

本時で取り上げる内容項目は、C 公正、公平、社会正義「正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること。」である。

正義と公正さを重んじるということは、道理にかなって正しいことを自ら認識し、それに基づいて適切な行為を主体的に判断し、実践しようとする意欲や態度をもつことである。そして、よりよい社会を実現するためには正義と公正さを重んじ、物事の是非を見極めて、誰に対しても公平に接し続けようとする必要がある。

第3学年では、差別や偏見の不合理を理解するとともに、一面だけでなく全体を見極めて正しく判断し、公平に接することを大切にしながら、差別や偏見のない社会の実現に向けて努力していこうとする態度を養っていきたい。

(2)生徒の実態について

本学級の生徒は、公正、公平な態度で接しようとする努力し互いに助け合いながら様々な活動に取り組んでいる。さらに社会生活における矛盾や葛藤、差別や偏見といった社会的な問題についても関心をもち始めている。しかし、現実には固定化しがちな人間関係の中で安易に多数の意見に同調したり、一面だけを捉えて判断したり、公正でないと感じる場面に出会っても声を上げず流してしまったりする様子も見られる。

そこで、物事を正しく見極めて判断し行動することの価値について考えさせ、自分も社会の一員として差別や偏見のない社会の実現に向けて、身近なところから実践していこうとする態度を育てたい。

(3)教材について

本教材は「社会福祉の先覚者」として、少年の自立支援に献身的に取り組んだ留岡幸助の生き方を描いたものである。

少年時代に感じた身分差別の不合理をきっかけに、誰に対しても分け隔てなく接することを大切に、社会から置き去りにされがちな弱い立場の人々に寄り添い、家庭学校の設定と実践を通して非行少年の社会復帰に取り組む幸助の姿から、一面だけを捉えて判断するのではなく全体の姿を見極めて正しく判断し、自分の正しいと信じることに従って行動することの大切さについて考えさせたい。

4 板書例

<p>めあて 差別や偏見のない社会を実現するためにはどんな見方が大切なのか考えよう。</p> <p>社会福祉の先覚者 留岡幸助</p> <p>「罪人の心の支えになりたい」 ・ 罪を犯したからといって、人間としてひどい扱いを受けるのはおかしい。 ・ 生まれつきの悪人なんていないし、きっかけがあれば改心できる。 ・ この現実を放っておいてはいけない。自分の力でなんとか改善したい。</p> <p>← 家庭学校の設定</p> <p>北海道家庭学校での幸助の思い ・ 世間の偏見からこの子たちを守らなければいけない。 ・ 悪い人間だと決めつけてはいけない。 ・ 少年たちが立ち直れるよう力になりたい。 ・ 家庭的な雰囲気の中で、家族のように大切にしたい。 ・ 社会の中でこの子たちが力を発揮できるようにしていきたい。 ・ 一面だけを見て判断するのではなく、この子たちのよさや可能性を伸ばそう。</p> <p>差別や偏見をなくすために 決めつけた見方をしない 一面だけを見て判断しない よさや可能性に着目する</p> <p>これからの自分にどう生かすか</p>
--

5 他の教育活動との関連

社会科〔公民的分野〕（基本的人権）

(3) 慈善鍋

1806（明治39）年の年の瀬、貧しさで餅を買えない人々に軍平は餅を配る「慰問籠」の運動を始めた。これが、歳末救助運動の初めとなり後には恒例となった。やがて街頭に鍋をつるして通行人から寄付を募る「慈善鍋」と呼ばれるものとなった。

その後、名称が「社会鍋」と変わった。

現在では、救世軍が歳末に生活困窮者のための街頭募金運動として行っている。

〈慈善鍋、社会鍋が詠まれた俳句〉

- ・ 来る人に我は行く人慈善鍋（高浜虚子『五百句』昭和8年）
- ・ かるがるとにげあしのびて社会鍋（飯田蛇笏『山響集』昭和15年）

(4) 『平民の福音』

軍平は、1899（明治32）年夏、機恵子との結婚後間もなく救世軍から2週間の休暇をもらい横浜市外に小さい部屋を借り受けて休養した。その間、早朝から起きて、機恵子とともに『平民の福音』を書き上げた。軍平は、入信当時から日本の一般民衆が読んでよくわかるようなキリスト教入門書を著したいと念願し、かねてから資料を集めていたものをまとめた。内容は、天の父上、人の罪悪、キリストの救い、信仰の生涯、職分の道の5章に分かれている。多くの聖句、例話、詩歌などを引用し平易な言文一致体で書かれている。

(5) 参考文献等

- ・ 『山室軍平』 高道 基 （日本基督教団出版局）
- ・ 『山室軍平：人道の戦士』 山室武甫 （玉川大学出版部）
- ・ 『山室軍平やさしさを生きる』 佐藤卓志 脚本
タケバヤシ哲郎 画（哲多町）
- ・ 『山室軍平選集』全十巻（山室武甫、山室軍平選集刊行會）
- ・ 『郷土にかがやく人々Ⅱ』（日本文教出版社）
- ・ おかやま人物往来 山室軍平

<http://degioka.libnet.pref.okayama.jp/mmhp/kyodo/person/yamamurogunpei/gunpei-short.htm>

7 参考資料

(1) 山室軍平（日本救世軍の創設者・社会事業家・宗教家）について

山室軍平は、8歳で母の弟（足守の杉本弥太郎）の養子となる。その後、築地の活版所で働きながら東京専門学校（早稲田大学）とイギリス法律学校（中央大学）の講義録を取り寄せ独学をする。17歳の時、新島襄を慕って京都に赴き、キリスト教青年会の夏期学校を受講し、その年の9月同志社普通学校に首席で入学した。19歳の時、濃尾大震災の孤児救済を努め、石井十次の資金募集を助けた。22歳で苦学した同志社を卒業前に辞めて、高梁教会の伝道師となった。翌年、上京して救世軍を訪ね、入軍した。結婚後には、妻の機恵子とともに『平民の福音』を執筆した。

そして、生涯において様々な救済事業を行っている。主なものに、

- ・ 貧しい人々を救済する歳末の慈善鍋運動
- ・ 結核診療所の開設
- ・ 不況対策としての労働者紹介所開設
- ・ 児童虐待防止運動
- ・ 貧しい人でも診療を受けられる救世軍病院の開設
- ・ 米騒動や関東大震災での救済活動

などがある。

山室軍平のこのような活動は、子どもの頃からの「善いことをしたい」「人々の役に立つことがしたい」という思いからであり、生涯の思いでもあった。軍平の意志を受け継ぐ「哲多町ボランティア館」が本郷小学校の横に建てられている。

(2) 救世軍

キリスト教プロテスタントの一派。1865年、ウィリアム＝ブースによって、イギリスのロンドンに創設された。東ロンドン伝道会に始まり、1878年以後「救世軍」と称し軍隊組織により伝道、教育、社会事業などを行い世界的に発展した。1895（明治28）年日本に渡来した。山室軍平は、日本人として最初の救世士官となった。今日の救世軍の働き（伝道や社会奉仕活動）は、軍平に負うところが大きく、救世軍の最高の荣誉である「創立者章」を受けている。

6 学習指導過程

○は基本発問 ◎は中心発問

学習活動	主な発問と生徒の反応	指導上の留意点
1 将来の夢や願いについてのアンケート結果から本時のめあてをつかむ。	○ アンケートの結果を見てどう思ったか。 ・夢のある人が多い。 ・何になりたいか決めている人は意外と少ない。 ・自分は決まっていないので、決まっていない人がいて安心した。	・夢がある生徒とない生徒それぞれが、自己の将来について意識できるようにし、学習課題へとつなげる。
自分の夢や願いを叶えるためにはどんな気持ちが必要なのか考えよう。		
2 教材「岐路に立つ」を読んで話し合う。 (1)印象に残ったところ (2)大学を続けるか辞めるか悩んでいた軍平の気持ち (3)大学を辞めた軍平の気持ち 3 これまでの自分を振り返る。 4 まとめをする。	○ 「岐路に立つ」を読んでどんなところが印象に残ったか。 ・大学を辞めるべきか続けるべきか悩んだところ。 ・迷ったすえに、大学を辞めようと思ったところ。 ・街頭で道行く人々に声をかけているところ。 ◎ 大学を続けるべきか、それとも辞めるべきか悩んでいた軍平は、どんなことを考えていたか。 [続けたい] ・食費を切り詰めてまで援助してくれた吉田さんに申し訳ない。 ・勉強したくて大学に入ったのに辞めたくない。 ・これまで努力してきたことが無駄になる。 [辞めたい] ・大学で学んだことが、役に立たない。 ・学んだことを人のために生かすことができない。 ・すぐにでも人を助ける仕事がしたい。 ○ 軍平が卒業を目の前にして大学を辞めたのは、どんなことを考えたからか。 ・今すぐに貧しい人や恵まれない人を助けたい。 ・今苦しんでいる人たちを助けるのが自分の使命だ。 ・苦しんでいる人たちの心を少しでも幸せにしたい。 ・弱い立場の人を救いたいという気持ちを貫きたい。 ○ これまで、将来の夢や願いについて考えるとき、自分を見つめ本当にやりたいことは何か真剣に考えたことがあるか。 ・考えたことがある ・少しあった ・あまりなかった	・軍平の業績に触れた上で教材を読ませるようにする。 ・印象に残ったところをもとに中心場面に意識が向くようにする。 ・自分の考えをワークシートに書かせてからグループで話し合うようにする。 ・大学を続けるか辞めるかで悩んでいる軍平の多様な気持ちを出し合わせる。 ・卒業目前の大学を辞める決断をした軍平の気持ちから、自分の本当にやりたいことは何かを考えることの大切さに気付かせる。 ・心の物差しどのあたりに位置付くか考えさせる。 ・理由を話し合うことで、これまでの自分を振り返り、自己のあり方について考えられるようにする。
評価の視点	・グループの話し合いを通して多様な考えを出し合い、自分を見つめ、本当に自分がやりたいことは何か考えようとする気持ちの大切さに気付くことができたか。 ・自分を振り返り、将来に向かって自分をしっかり見つめ、努力していこうとする意欲を高めることができたか。	

1 主題名 充実した生き方〔A 向上心、個性の伸長〕

2 ねらい

自分の夢や願いを叶えるためにどんな気持ちが大切なのかを考える中で、自己を見つめ、自分の本当にやりたいことは何か考えようとする気持ちの大切さに気づき、将来に向かって自らを向上させようとする態度を養う。

3 主題設定の理由

(1) 内容項目について

本時で取り上げる内容項目は、A 向上心、個性の伸長「自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求すること。」である。

自己を見つめるとは、自己について深く省みることであり、そのなかで一貫した自分の姿や将来像を思い描くことにつながる。これまでや現在の自分、将来こうありたいという自分を静かに見つめ直すことは、自己の向上を願って生きていく上で重要なことである。

第2学年では、自己を見つめることを通して、現在の自分や自分の将来について考え、自らを向上させようとする態度を養っていききたい。

(2) 生徒の実態について

本学級の生徒は授業や学校行事に活発に取り組むことができる。職場体験では、それぞれの事業所で仕事内容に興味を持ち、意欲的に取り組むことができた。その反面、自分の将来についての目標や夢については具体的に考えている生徒は少なく、どのように考えていけばよいのかわからないという生徒も多い。

そこで、自分の将来について夢や目標をもつことや、それに向かって努力し自らを向上させることの価値について考えさせたい。

(3) 教材について

本教材は、社会福祉活動に献身的に取り組んだ山室軍平の、自己の進路を決める際の心の葛藤を描いたものである。自己のあり方を問い続け、妥協することのない軍平の生き方を通して、自己を見つめ、自分の本当にやりたいことは何か、真剣に考えることの大切さに気付かせたい。

4 板書例

<p>心のものさし</p> <p>考えたことがある</p> <p>あまりなかった</p>	<p>めあて</p> <p>自分の夢や願いを叶えるためには</p> <p>どんな気持ちが大切か考えよう</p> <p>岐路に立つ — 山室軍平 —</p> <p>大学を続けるべきか、辞めるべきか悩んでいた軍平の気持ち</p> <p>「続けたい」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 食費を切り詰めてまで援助してくれた吉田さんに申し訳ない。 ・ 勉強したくて入ったのに辞めたくない。 ・ これまで努力してきたことが無駄になる。 <p>「辞めたい」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学で学んだことが、役に立たない。 ・ 学んだことを人のために生かすことができない。 ・ すぐにでも人を助ける仕事をしたい。 <p>卒業を目の前にして大学を辞めた軍平の気持ち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今すぐに貧しい人や恵まれない人を助けたい。 ・ 今苦しんでいる人たちを助けるのが自分の使命だ。 ・ 苦しんでいる人たちの心を少しでも幸せにしたい。 ・ 弱い立場の人を救いたいという気持ちを貫きたい。 <p>自分を見つめ本当はやりたいことは何か真剣に考えたこと</p>
--	---

5 他の教育活動との関連

- ・ 総合的な学習の時間（職場体験）

(5) 備前焼ひとくちメモ

(ア) 第二次世界大戦と備前焼

生活雑器として人々に愛された備前焼も戦時中には、燃料の松割木の安定供給のため軍に協力させられていた。従来銅で作られていた二宮尊徳像が武器製造のために徴発され、代用品が備前焼で作られて全国の学校に置かれた。また備前焼の頑丈なつくりを利用して、備前焼の手榴弾が作られた。

実際に使われることはなかったが、伊部の裏山で爆破の実験が行われたという。手榴弾は今でも伊部の窯元に保存されている。このことは戦争のすさまじさと物不足を感じさせる事柄である。

(イ) 「備前水甕水が腐らん」

備前焼に入れた水は腐りにくく、長持ちすると言われる。花を生けると花が長持ちし、また、金魚鉢などの水槽に備前焼の置物を入れておくと水は腐りにくく、水槽内側に付着する藻などの繁殖を抑えることができるらしい。備前焼の表面にはかすかな浸透性があり、甕は呼吸をし続けているため、中味も生き続けることができ、外側は気化熱の効果により、気温が高くても中は冷たさを保つことができると考えられている。

(6) 参考文献等

- ・『やきもの備前：歴史と風土』（山陽新聞社）
- ・『金重陶陽：人と作品』（鹿島研究所出版会）
- ・『人間国宝シリーズ9 金重陶陽』（講談社）
- ・『やきもの備前』（山陽新聞社）
- ・おかやま人物往来 金重陶陽

<http://degioka.libnet.pref.okayama.jp/mmhp/kyodo/person/toyo/touyou.htm>

- ・協同組合岡山県備前焼陶友会

<https://touyuukai.jp/>

7 参考資料

(1) 金重陶陽から若者へのメッセージ

「壁にぶつかることはだれにでもある。むしろ物事が分かれば分かるほど、壁に突き当たることは多くなるものだが、壁にぶつかることがすなわち次に飛躍するための足掛かりとなる。そこから次の道を切り開いていけばいいのだ。若い人には壁にぶち当たり、失敗を恐れることなく、どんどんやってもらいたいものだ。」

(2) 金重陶陽と備前焼

備前焼は、平安末期に現在の岡山県備前市伊部で成立し、鎌倉時代に現在のようになったと言われる。江戸中期には釉薬や絵付けをほどこしたのもも製作され、最盛期の頃には西日本一帯に広がった。明治期に入って安価な磁器が出回り、当時地味な生活雑器だった備前焼は急速に衰退した。しかし昭和28年頃に北大路魯山人、イサム・ノグチが備前を訪れ、金重陶陽らと交友を深めるようになり備前焼が全国的な視野で評価されるようになった。昭和31年金重陶陽が重要無形文化財（人間国宝）になったのを期に、備前焼を美術品として評価する動きが出て今に至っている。

(3) 備前焼について

備前焼は現在も大半が登り窯や穴窯で焼成されている。備前焼の土は、水田を掘り下げて、下層部にあるやや鉄分の多い「干寄(ひよせ)」という粘土を主として用いる。掘り出した粘土は2～3年風雨にさらし、これを水で戻して精製して粘土（陶土）にし、作陶まで8年くらい寝かせる。このように釉薬を使わない備前焼は特に土を大切にしている。長時間かけて焼き上げた備前焼は、その色や技法で、「胡麻(ごま)」「棧切(さんぎり)」「緋襷(ひだすき)」などに分類され、火と土の作り出す芸術は高い評価を得ている。備前焼は使えば使うほどしっとりとした色合いや艶が出て変化し、人々に愛用されている。

(4) 金重陶陽の土へのこだわり

「我々の祖先は窯の火を絶やすことなく千年の歴史を守り抜いてきた。備前焼を日本の焼き物として残してくれた。祖先に対する感謝の念をもち、土に素直に、火に素直にというのが私の信条で、小さい頃から土に感謝していた。」と貪欲なまでに土探しを徹底的した。

また、「米より土が大事。」と土味の良さを感じ取り、良土を探し求めて田んぼを歩き回ったエピソードがある。

6 学習指導過程

○は基本発問 ◎は中心発問

学習活動	主な発問と生徒の反応	指導上の留意点
1 目標に向かって取り組む時の気持ちについて話し合い、本時のめあてをつかむ。	○ 自分は目標に向かって粘り強くやり抜く方だと思うか、あきらめてしまう方だと思うか。 ○ あきらめてしまった時、どのようなことを思ったか。 ・もっと続けておけばよかった。 ・これからはもう少し努力したい。	・心情円を使って、意思表示をさせる。 ・誰にでも途中で諦めてしまった経験があることを押さえ、後悔する気持ちをもとに学習課題につなぐようにする。
目標に向かってやり抜くにはどんな気持ちが大切なのか考えよう。		
2 教材「土を味わう男」を読んで、陶陽の気持ちについて話し合う。 (1) 探し求めていた土がなかなか見つからないとき (2) 探し求めていた土をやっと見つけ出したとき (3) 陶陽の行動を支えた気持ち 3 これまでの自分を振り返る。 4 まとめをする。	○ 土を探し、田んぼでひとりため息をついている時にどんなことを考えていたか。 ・どんなに努力しても理想の土は見つからない。 ・いつまで続けたらよいのだろう。 ・理想の土を見つけるのは無理かもしれない。 ○ いつものように土を口にして、涙があふれ出した時、どんなことを思っていたか。 ・やっと探し求めていた土に出会えた。 ・あきらめずに探し続けてきてよかった。 ・これで理想の備前焼が作れる。 ・今までのことは無駄ではなかった。 ◎ 陶陽が頑張り続けたのは、どんな気持ちがあったからだろう。 ・認められる備前焼を作りたい。 ・多くの人に愛される備前焼を作りたい。 ・備前焼の素晴らしさを全国に広めたい。 ・桃山時代のような古備前を復活させたい。 ・自分が理想とする備前焼を作りたい。 ・金重家の長男として、自分が未来を切り開くという強い気持ちがあった。 ○ 陶陽が今の自分にメッセージをくれたら、どんな内容のものをくれるだろうか。これまでの自分を振り返りながら考えてみよう。 ○ 「陶陽から若者へのメッセージ」に込められた思いについて考えよう。	・備前焼と陶陽について簡単に説明して教材を読む。 ・前向きに頑張る陶陽にも、あきらめそうになる心の弱さがあったことに共感できるようにする。 ・困難を乗り越え、苦勞の末に見つけたことで、喜びが大きかったことを押さえる。 ・グループでの話し合いや全体での話し合いを通して、困難に負けず粘り強く取り組む強い意志や前向きな気持ちの大切さについて考えさせる。 ・これまでの自分の生き方を振り返らせ、これからの自分にどのように生かしていくのか考えられるようにする。 ・陶陽の若者への言葉を提示し実践への意欲に繋げる。
評価の視点	・グループや全体での話し合いを通して多様な考えを出し合い、やり遂げようとする強い意志や困難を乗り越えようとする前向きな気持ちの大切さに気付くことができたか。 ・これまでの自分の体験を振り返り、目標に向かって粘り強く着実にやり遂げようとする意欲を高めることができたか。	

1 主題名 強い意志を持って〔A 希望と勇気、克己と強い意志〕

2 ねらい

目標に向かってやり抜くために大切な気持ちを考える中で、やり遂げようとする強い意志で困難を乗り越えようとする前向きな気持ちが大切なことに気づき、目標に向かって粘り強く着実にやり遂げようとする態度を養う。

3 主題設定の理由

(1)内容項目について

本時で取り上げる内容項目は、A 希望と勇気、克己と強い意志「より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気を持ち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること。」である。

人間としてよりよく生きるには、目標や希望をもつことが大きな力となる。身近で日常的な努力によって達成できる小さな目標であっても、それが達成された時には満足感を覚え、自信と次に向けて挑戦しようとする勇気をもつことができる。さらに、それらがより高い目標へ向かう意欲を生み、新しい可能性を切り拓く原動力となっていく。

第2学年では、一つのことに打ち込むことの素晴らしさを知るとともに、最後までやり抜く強い意志の大切さに気付かせたい。そして、目標や夢に向かって粘り強く努力しようとする態度を育てたい。

(2)生徒の実態について

本学級の生徒は、素直で仲が良く、行事等の際には目標に向かって、助け合い励まし合いながら協力して活動ができる。しかし、小規模校で家庭や地域に守られているがゆえに、日々の生活の中では、粘り強く頑張ることが苦手だったり、困難にぶつかるとすぐに諦めてしまったりするといった、甘い気持ちを持ち合わせている。また、挫折や失敗を回避するために安易な選択をしたりすることもある。

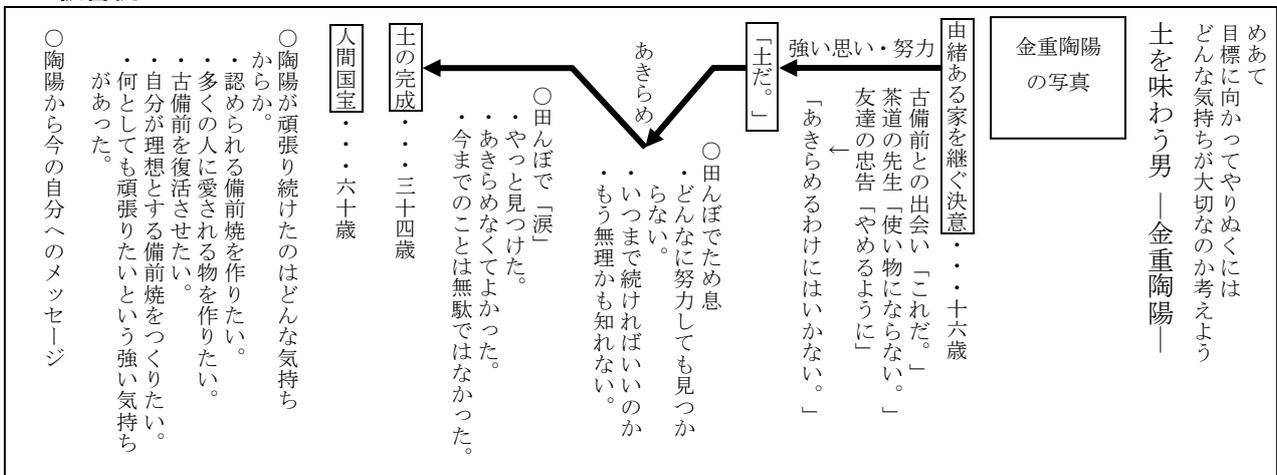
そこで、目標達成のために、少々の困難にくじけることなく、最後まで粘り強くやり通す強い意思と態度を育てていきたい。

(3)教材について

本教材は、備前焼窯元六姓のひとつ「金重家」に生まれ、備前焼で初めて国の重要無形文化財(人間国宝)になり、「備前焼中興の祖」と呼ばれる金重陶陽の生き方を取り上げたものである。

桃山時代の古備前の再興のため、特に土を求め、自分の力の及ぶ限りの努力を尽くした陶陽の生き方に着目させ、時にはくじけそうになりながらも、より高い目標の実現に向けて努力していくことの大切さに気付かせたい。

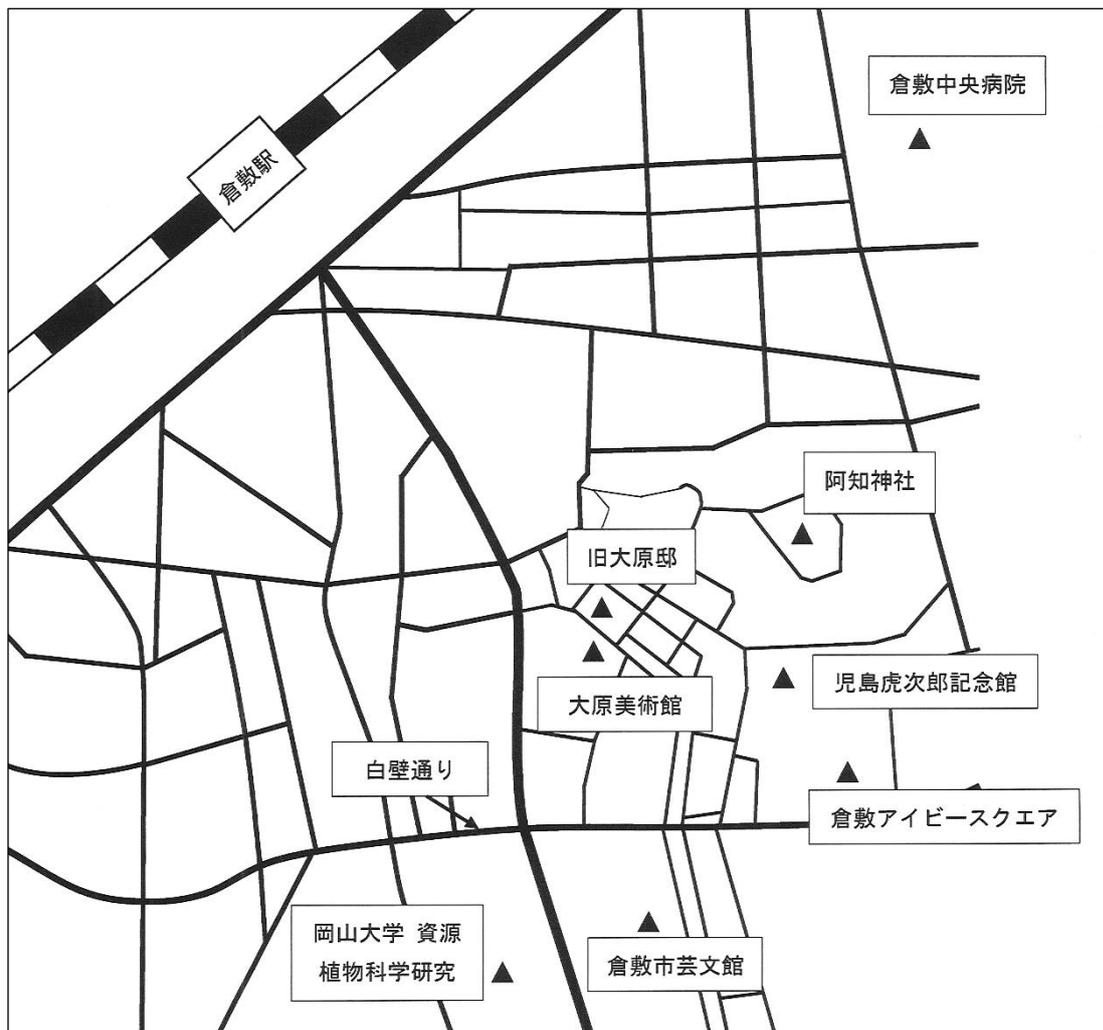
4 板書例



5 他の教育活動との関連

美術科 (表現)

(2) 大原美術館周辺地図（大原孫三郎ゆかりの施設等）



(3) 参考文献等

- ・『大原孫三郎傳』大原孫三郎傳刊行会
- ・『大原美術館ロマン紀行』今村新三（日本文教出版）
- ・『わしの眼は十年先が見える：大原孫三郎の生涯』城山三郎（飛鳥新社）
- ・『夢かける 大原美術館の軌跡』（山陽新聞社）
- ・『児島虎次郎略伝』児島直平（児島虎次郎伝記編纂室）
- ・「クラレスペシャル『世のために描く光と夢』～大原孫三郎と児島虎次郎の絆～」
（テレビせとうち）
- ・大原美術館ホームページ <https://www.ohara.or.jp>

7 参考資料

(1)大原孫三郎の手がけた主な社会事業

(ア)大原奨農会（現「岡山大学資源植物科学研究所」）

孫三郎は、米の品種改良と農業技術の向上を図り、また小作農に対しては、技術指導員を派遣するなどして、自作農への自立を促そうとした。大原奨農会は、1914年、農業の科学的研究と農業改良のために設立され、1928年、大原農業研究所と改称された。ここでの研究が、岡山名産の白桃やマスカットを生むこととなる。

(イ)大原社会問題研究所（現「法政大学大原社会問題研究所」）

石井十次の死後、その事業を継承した孫三郎は、「救貧より防貧」との思いに至り、貧困の原因を科学的に究明し、その解決策を見出そうと、1919年、大阪市に設立した。前身は、石井記念愛染園内の救済事業研究室であった。

(ウ)倉敷労働科学研究所（現「日本労働科学研究所」）

孫三郎は経営者でありながら、倉紡万寿工場内に、労働問題の研究施設を作った。工場内の労働衛生や保健管理の改善を目的とした研究から、女子工員の深夜労働の撤廃や就労年齢の引き上げなど、戦後の「労働基準法」のベースとなる多くの提案がなされた。1937年、日本学術振興会に寄附されて東京に移転。現在も神奈川県川崎市に存続。

(エ)倉紡中央病院（現「倉敷中央病院」）

倉敷紡績従業員約一万人とその家族のみならず、広く一般にも開放された。個室の使用を料金でなく病気の軽重で振り分けたり、従業員や患者への差し入れや贈り物を禁止したりなど、平等主義で治療本位を経営方針とし、東洋一の理想的な総合病院を目指した。

(オ)その他

孫三郎の他の社会事業としては、資料にある「大原奨学会」の設立や石井十次の事業への援助と継承に加えて、中央の一流講師による「倉敷日曜講演会」の開催、倉敷商業補習学校（現「倉敷商業高校」）の開校、倉紡の保育所を一般開放した「若竹の園」の設立、ヨーロッパの学術図書の購入と図書館設立など枚挙にいとまがない。

6 学習指導過程

○は基本発問 ◎は中心発問

学習活動	主な発問と生徒の反応	指導上の留意点
1 友達関係について考え、本時のめあてをつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 友達と気持ちが通じ合ってよかったなど思ったことがあるか。 ○ 友達関係で悩んだことはあるか。それは、どんなことか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達関係に関するアンケートの結果を簡単に紹介し、生徒が学習課題をとらえやすくする。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 友情を深めていくためにはどんな気持ちが大切なのか考えよう。 </div>		
2 教材「真の友とともに」を読んで話し合う。 (1) 手紙を送った虎次郎の気持ち (2) 手紙を受け取った孫三郎の気持ち (3) 友情を深めるために大切な気持ち 3 これまでの自分について振り返る。 4 まとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 虎次郎は、どんなことを考えて孫三郎に何通もの懇願の手紙を送ったのだろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・日本人にもぜひ本物の絵を見てほしい。 ・日本の美術教育のために役立てたい。 ・孫三郎なら気持ちを分かってくれる。 ・孫三郎のことを信じていた。 ◎ 虎次郎からの手紙を受け取った孫三郎はどんなことを考えていたのだろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・今は留学に専念してほしい。 ・そんなお金を出せる余裕はない。 ・もっと有益なものにお金が使えないのでは。 ・虎次郎はよい絵を見る機会をつくってくれる。 ・購入した絵を日本のために役立ててくれる。 ・虎次郎の思いに応えたい。 ・虎次郎の情熱を無駄にしたくない。 ・虎次郎のためにできるだけことをしよう。 ○ 2人の生き方から、友情を深めていくにはどんな気持ちが大切だろう。 <ul style="list-style-type: none"> ・お互いが考えていることを理解しようとする気持ち。 ・相手を心から信じようとする気持ち。 ・相手の期待に応えようとする気持ち。 ○ 自分の友達関係を振り返り、2人の生き方をこれからの自分にどのように生かしていきたいか書こう。 ○ 先人の友情についての言葉を聞こう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教材の導入時に、2人の写真を示しながら概要を説明し学習に見通しをもたせる。 ・あきらめずに手紙を送ったことから、虎次郎の孫三郎を信じる気持ちを押さえる。 ・グループで話し合う時間を取った後、全体で共有する。 ・生徒の発言に対して問い返し、考えを深めさせる。 ・高額な資金がかかっても、購入を認めたことから、孫三郎の虎次郎への揺るがない友情と信頼について考えさせる。 ・これまで話し合ってきたことをもとに、友達とは互いに理解し信じ合う関係であることをおさえるようにする。 ・自分のこれまでの友達関係を頭に描きながら、今の自分にどう生かすか考えさせる。 ・先人の言葉を通して、実践への意欲を高めることができるようにする。
評価の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・グループでの話し合いなどを通して多様な考えを出し合い、互いに相手のことを理解し信じ合おうとする気持ちの大切さに気付くことができたか。 ・自分の友達とのかかわり方を振り返り、互いに信頼し励まし合っていこうとする意欲を高めることができたか。 	

1 主題名 真の友情 [B 友情、信頼]

2 ねらい

友情を深めていくために大切な気持ちを考えていく中で、互いに相手のことを理解し信じ合おうとする気持ちが大切なことに気づき、友達と互いに信頼し合い励まし合っていこうとする態度を養う。

3 主題設定の理由

(1)内容項目について

本時で取り上げる内容項目は、B 友情、信頼「友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。」である。

真の友情は、相手の人間的な成長と幸せを願い、互いに励まし合い、高め合い、協力を惜しまないという平等で対等な関係である。友達を信頼するとは、相手を疑う余地がなく、いざという時に頼ることができる信じて、全面的に依頼しようとする気持ちをもつことであると考えている。

第2学年では、友情は人間にとってその人生を豊かにするかけがえのないものであることを理解させ、ともに支え合い励まし合っていこうとする態度を養っていききたい。

(2)生徒の実態について

本学級の生徒は、人間関係が固定化したり、一緒にいて楽しいから行動を共にしたりする傾向が見られる。本当に心を許し合える友達を求めてはいるが、その反面、特定の人間関係に固執したり、相手に安易に同調したり、もしくは自分が傷つくことを恐れて距離をおいた関係を保って付き合ったりしている。また、深く考えず自分と違うところを批判したり、お互いのためにならないことをしてしまったりする生徒もいる。

そこで、真の友情や友情の尊さについて理解を深め、自分を取りまく友達との友情をより一層大切に育てたい。

(3)教材について

本教材は、財閥の家に生まれた大原孫三郎が、人間関係に挫折しながら、真の友情を求め、石井十次や児島虎次郎との出会いを通して、真の友を得て、大原美術館の設立に至った話である。主人公である大原孫三郎が人間関係の悩みや葛藤を乗り越え、信頼と友情という強い絆で結びついた虎次郎との関係から、友情とは相手を心から信頼し、お互いを尊重し合うことが大切であることに気付かせたい。

4 板書例

<p>大原孫三郎の 写真</p> <p>○これからの自分に生かしていきたいこと</p>	<p>○手紙をもらった時の 気持ちは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・留学に専念してほしい。 ・今はそんな大金は出せない。 ・もっと有益なものに使いたい。 ・虎次郎はよい絵を見る機会をつくってくれる。 ・日本のために役立ててくれる。 ・虎次郎の思いに応えたい。 ・虎次郎のためにできるだけのことをしよう。 ・虎次郎は信じられる人間だ。 ・虎次郎のためにできることをしよう。 ・友を信じなくてどうするんだ。 	<p>○友情を深めるために 大切な気持ちは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お互いが考えていることを理解しようとする気持ち。 ・相手を心から信じようとする気持ち。 ・相手の期待に応えようとする気持ち。 ・相手が望むことをしたいという気持ち。 	<p>○手紙を送っている時の 気持ちは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の人に本物の絵を見てほしい。 ・日本の美術教育に役立てたい。 ・孫三郎ならわかってくれる。 ・孫三郎を信じていた。 	<p>児島 虎次郎 の写真</p> <p>真の友とともに — 大原孫三郎 —</p> <p>めあて 友情を深めていくためには、どんな気持ちが必要なのか考えよう。</p>
---	--	--	---	--

5 他の教育活動との関連

美術科 (鑑賞)、社会科 [歴史的分野] (近代)

